

## 解題

曲亭馬琴の中本型読本は全部で八作ある。次に示したように、一作を除いて七作に改題本や再刻本が出されている。合巻風絵題簽を持つもの、改題されて半紙本仕立てになつたものなど、その様相は一定しないが、長期間に涉つて出され続け、多くの読者に読まれ続けられたのである。

- 一 高尾舩字文 長喜畫 寛政八年序 一七九六 蔦屋重三郎板 〔岩瀬〕  
 ○再刻本 國貞畫 一八三五 天保六、七年刊 中村屋勝五郎他板 〔國會〕
- 二 小説比翼文 北齋畫 享和四年刊 鶴屋喜石衛門板 〔國會〕  
 ○遊君操連理餅花、丁卯、仙鶴堂版 〔個人〕
- 三 曲亭伝奇花釵兒 未詳 享和四年刊 濱松屋幸助他板 〔蓬左〕
- 四 敵討誰也行燈 豊國畫 文化三年刊 鶴屋金助板 〔向井〕  
 ○再纂花川譚 丸善 〔國會〕
- 五 益石皿山記（前後） 豊廣畫 文化二、四年刊 住吉屋政五郎板 〔國會〕  
 ○繪本皿山奇譚 〔個人〕
- 六 莖萱後傳玉櫛笥 北齋畫 文化四年刊 榎本惣右衛門・平吉板 〔高木〕  
 ○石堂丸 莖萱物語 〔個人・天理〕
- 七 興談坡堤庵 豊廣畫 文化五年刊 上總屋忠助板 〔天理〕  
 ○薄雲が快氣 堤庵二枚羽子板 一八〇八 文化七年京山序 〔高木〕
- 八 敵討枕石夜話 豊廣畫 文化五年刊 上總屋忠助板 〔國會・高木〕  
 ○淺呻寺 一家譚 離同土石與木枕 京山序 〔石水博〕

本作は、馬琴の中本型読本としては最後の作品となる。

題名からも知れる通り『敵討枕石夜話』で扱われるのは、浅草という伝承空間の代表的な姥ヶ池の一つ家伝承である。黒本以来草双紙に恰好の題材として扱われ、時には開帳を当て込んだ際物となり、広く人口に膾炙したものであった。

まず序文で『回國雜記』や『江戸砂子』巻二(5)浅草「明王院」の項を長々と引用し、浅草姥が池の一つ家伝承を紹介して見せる。そして敵討物という型に従つて「因を説き、果を示す」のである。口絵の贊には「戒之戒之出乎尔者反乎尔者也」(『孟子』梁惠王下)、「將以釁鍾」(『孟子』梁惠王上)等と書き込む。登場人物たちには「綾瀬」「浅茅」「駒形」などと浅草近辺の地名が与えられている。一方、一つ家の〈石の枕〉からの連想で『和漢三才図会』に見える常陸国枕

石寺の由来を付会している。この寺の回国行者の路銀を奪つて殺害した戸五郎が、一旦は栄え、やがて没落するのは座頭殺しに絡む長者没落譚の形式を踏む。海上を進行する船が突然動かなくなり、船底を調べると大きな角が刺さっていたという奇談は、大槻茂賀『六物新志』（天明六年）の「一角」の条や『土佐淵岳志』などを参照したのであろう。馬琴はこの角を殺された回国行者の怨魂が化したものとし、さらに『吾妻鏡』四十一の建長三年三月六日浅草寺に「牛の如き物」が出現したという記事を利用、この「牛の如き物」を「牛鬼」とする。播本真一氏は、この『吾妻鏡』の記事を馬琴自身が『故事部類抄』に抄録していることを明らかにしている（『八犬伝・馬琴研究』第二章第一節『故事部類抄』について、新典社、二〇一〇年）。この〈牛鬼〉によつて戸五郎の妻瀬瀬が殺され、娘浅茅は吐きかけられた涎沫により懷胎、五年後に娘駒形を産む。中尾和昇氏は、この趣向等が『古郷帰の江戸咄』（元禄七年）や古淨瑠璃『丑御前の本地』に拠つてゐること、また枕石寺の縁起は『和漢三才図会』のほかに『親鸞聖人御旧跡二十四輩記』卷五「常陸国久慈郡上河合村龍上山大門院枕石寺」の項に拠つてゐるとする（曲亭馬琴『敵討枕石夜話』考、「國文學」第九三号所収、関西大学国文学会、二〇〇九年三月）。また、夜な夜な牛鬼の吠えた島が「牛島」であるとして地名由来譚としているが、後年『燕石雑志』卷三「地名の訛謬」では率強付会の説として退けている。また『八犬伝』八輯卷八下では、村人が牛鬼と呼ぶ牛の角によつて毒婦船虫が突き殺される場を用意した。

その後、浅茅は一ツ家で旅宿を営み、石の枕で旅人を殺して路銀を奪うようになる。ここで白川院御製として『江戸砂子』卷二所引の「武藏には霞が関や一ツ家の石の枕や野寺あるてふ」という歌を引く。ある晩投宿した美少年の身代りになつて駒形は石の枕に死す。これを知つて怒つた浅茅は美少年を追うも池の端で討たれ大蛇と化すが、因果を諭され得度する。折よくその場に居合わせた戸五郎は、美少年が自分の殺した回国行者の息子であることを知つて討たれる。

敵討物としては安易な構成であり、筋立も伝承等によるところが多いが、展開過程にさまざまの趣向を取り入れており、そこに読者の興味を吸引しようとしている。人口に膾炙した題材を用いる場合は、誰しも結末は知つてゐるわけであるから、その改編ぶりにこそ作意が払われるのである。本作は、浅草という伝承的空間に〈石枕〉と〈牛鬼〉に関する伝承を重ね合わせていく手法が採られている。

ところで馬琴が『枕石夜話』を執筆したのは文化三年六月からであるが、なぜか途中で筆を折つてゐる。にもかかわらず文化四年になつてから慶賀堂上総屋忠助の要求で続きを執筆したのである。この慶賀堂は文化三年刊の半紙本読本『三國一夜物語』（五巻五冊）の板元であつたが、売り出して間もない同年三月の大で板木を焼失してしまつたのである。前述の『巷談坡隠庵』が文化三年七月に稿了していたのに文化五年の新板となつたのも、こうした事情があつたからだと考えられる。

さらに推測を重ねれば、馬琴の中本型読本の板元の中で、慶賀堂だけが中本型読本を出す以前に半紙本読本の板元になっているので、早くから何か特別な関係があつたのかもしれない。また一度筆を折つた作品の「嗣録」をしたのも、この板元に対する配慮からであろう。いずれにしても、いま注意したいのは、板元の注文で「嗣録」した『枕石夜話』が文化三年六月に起筆されている点である。つまりこの時点で作品の構想はまとまつていたということになる。ならば馬琴が中本型読本を執筆したのは文化三年の秋までと考えてよいだろう。折しも生活のために続けてきた手習いの師匠をやめているのである。つまり、この時点で初めて江戸読本作家としての見通しがたつたということを意味しているのであり、それと同時に中本型読本の筆を執ることもなくなつたのである。

さて、『枕石夜話』に改題改修本が存在することは、早くに横山邦治氏の紹介がある（『讀本の研究—江戸と上方と』、風間書房、一九七四年、二五一頁）。外題に「繪本枕石傳」とある半紙本四冊で、伊賀屋勘右衛門板。内題尾題に入木し『浅艸寺讐讐同士石與木枕』とし、口絵を削り、挿絵の薄墨板を省略し、序文を文化七年京山のものに代えている。また、広島大学には同板の改題後印本『觀音靈應譚』（半紙本五冊、丁子屋源次郎板）が所蔵されている。中村幸彦氏旧蔵本（国文学研究資料館マイクロフィルムに拠る）もあるが、いずれも後印本である。

曲亭馬琴の多くの中本型読本が、合巻風絵題簽を伏して改題改竄されたことは、冒頭に掲げた一覧表からも分かる通り、本作にも同様の本があつた。石水博物館蔵『浅艸寺讐讐同士石與木枕』（文化七年、伊賀勘）である。新たに入れ替えられた山東京山の序文は未紹介なので全文を引いておく。

### 叙言

むかし／＼の赤本ハ、ねりま大根ふといのね、やんりや様はありや／＼、といふことば書  
にして、いかにもひなびたる書ざまなりしに、金々先生榮花の夢、一度さめてよりのち、  
古調変じて洒落となり、洒落亦変じて古調となる。洒落と古調とかならずしも、文化已の  
夏日、伊賀屋のあるじ、予が晝寝の枕をたゝきて、此書に序せよ、と斬たり。巻を縻て閱  
れば、友人馬琴子が、例の妙作なり。教導にてハ四情河原、伊勢ハ白子の勸善懲惡、何地  
か一度見た機関、作者の胸のつもり細工、此一屋の扉を覗バ、石の枕の故事も、今日前に  
見るごとく、老人窓からあいさつするまで、こまやかに御目がとまれバ、前篇ハおかハり  
く。

### 文化午のはつ春

ところで、改題改竄本以外にも挿絵などをすべて描き直した『枕石夜話』の再刻本が存在する。この再刻本の早印本を所蔵している鈴木俊幸氏の御厚意によつて借覧する機会を得たので書誌を記しておく。

『觀音利生記』 中本（十七・五×十一・八纏） 四卷四冊

表紙 鳥の子色（灰色で沙羅形地に花菱丸を散らす）

題簽 左肩（十二×二・七） 「觀世音利生記（春～冬）」

見返 「曲亭翁著 歌川國直畫／觀世音利生記／東都 金幸堂板」

柱刻 「くわんおん一（～四）」

刊記 「京都書林／山城屋佐兵衛、河内屋藤四郎、大文字屋専藏

構成 東都書林／丁子屋平兵衛、金屋又兵衛、菊屋幸三郎板（卷四後ろ表紙見返し）

卷一、松亭金水叙二丁、口絵二丁三図（濃淡薄墨入）、本文十七丁半、挿絵三図。

卷二、十九丁半、三図。卷三、二十一丁、三図。卷四、十八丁以下破損、三図。

備考 改印なし。本文は用字の違いを除けば概ね初板本に忠実である。

口絵挿絵中に新たに贊が加えられており、次のような松亭金水の叙文が付されている（句読点は原文になし）。

觀音利生記叙

妙法蓮華經普門品は、觀音大士の功力を挙て、その靈験を説れたり。そもそも觀世音菩薩ハ、廣大無邊の大徳ある事。世の人の知る所ながら、わきて武藏の浅草なる。大慈大悲正觀音ハ。往昔、世々の天子將軍も、尊崇し給ふ。靈佛なれば、貴賤道俗渴仰して、利益を蒙るもの無量なり。謂ある哉かの經に、若人あつて諸の財宝奇珍を求める為、海に浮ぶの時にあたつて、惡風竜魚の災あり。此時御名を称ふれば、竜魚の難を免かれて、風穩になるとなん。迅雷鳴雨烈しく、樹木を碎く時に遇ひて、御名を称ふる人あれバ、時に應じて消散す。其餘の功德甚深无量。實に不可思議の灵應あれば、挙て人の信ずるものから。日々に新にまた日々に、新なりける感應あり。そが中に古へより、語り聞え書に留て、話柄となすことの、また洩たるも鮮からず。因て曲亭子が遺るを拾ひ。今様風流の文に編て、もて童蒙の伽となし。且勸懲の一助となす。その筆頭の妙なるハ、例の翁の事なれば、今更にいふにたらず。必求て看給へかしと。販元にかはりて願奉つるになむ。

應需 松亭金水誌

さて、阪急池田文庫に所蔵されている『觀音利生記』という本は、内題「觀音利生記」、外題「繪本觀世音利生記」、半紙本五冊、曲亭馬琴纂補、松亭金水叙、弘化期の刊行であろうか、巻三と五の巻頭に改印「渡」がある。刊記には「皇都藤井文政堂／寺町通五条上ル町／書林山城

屋佐兵衛」と見え、この再刻本の改題後印本である。

つまり、『枕石夜話』は初板の後、合巻風絵題簽をもつ改題改竄本が出され、その後、半紙本仕立ての改題本となり、さらに挿絵などを改刻した再刻本が出されて、後に半紙本仕立ての改題本となつてゐるのである。原序文や薄墨は初板しか見られない。

ところが、この再刻本のほかにも、切附本『金龍山聖觀世音靈驗記』（外題「觀音利益仇討」、松園梅彦作、直政画、安政二卯歲睦月序、品川屋朝治郎板）といふ、浅草寺縁起を人話にして『枕石夜話』を抄録したものが存在する。序文を紹介しておく

金龍山聖觀世音靈驗記叙

抑も大聖觀自在尊者ハ安養補處の薩埵婆有縁の大士也弘誓ハ潮夕の池よりも深く慈悲ハ崑崙の岫よりも高し斯廣大無辺なる大德あるにより代々の天子將軍より蒼生に至る迄举て尊信なすものから日々に新なる不可思議の靈應ありされど其所謂を巨細く知れる者の少きをいかにせんとて往昔出現ありし由來ハいふもさらなり其靈験の有し事を文をかざらす作を交えず兒童に分解安きやうに書つゞりてよと板元の信者にそゝのかされて不佞も今日より信者となりて此一小冊を編するなりされどかゝる文作を以て活業となせる者の多なるに半面学の僕に此事をゆだねらるゝも偏に觀世音の導せ給ふなるべしと九拜して吸月樓上に筆を執る

安政二卯歲睦月

松園主人梅彦藏版

このようにきわめて多種の改題本や再刻本、さらには抄録本が出来され続けたのは、扱われている浅草姥ヶ池の「一ヶ家伝承が、黒本以来草双紙に恰好の題材であり、時には開帳を当て込んだ際物ともなり、広く人口に膾炙したものであつたからであろう。

**【付記】**この「解題」は未だ活字化して公開していないが、以下の拙稿に基づき、現時点に於いて知り得た研究史などを踏まえて改稿して拙サイト(<https://funikura.net>)で公開したものである。念のために初出を記しておく。「『觀音利益敵討枕石夜話』—解題と翻刻—」（『教育実践紀要』第四号、明治学院中学・東村山高等学校、一九八一年六月）。「敵討枕石夜話」ノート（『近世部会会報5』、日本文学協会近世部会、一九八一年二月）。「中本型読本の展開」（『読本の世界—江戸と上方—』第三章、世界思想社、一九八五年）。『江戸読本の研究』第二章「中本型の江戸読本」（ペリカン社、一九九三年）。

## 書誌

中本 二巻二冊。縦一八・四糸×横一三糸。

表紙 千歳茶（色見本「伝統の色」大日本インキ化学刊、八二三番）色地に筋を散らす。

外題 題簽表紙中央。縦一二・五糸×五・五糸。藍色摺子持桿内に石碑の意匠。中に白抜き

にて「孤館記傳觀音利生 敵討枕石夜話」「曲亭主人著「一柳齋画」「卷之上（下）慶賀堂様」。

見返 車の中に「溯」字の意匠。「曲亭馬琴著」「敵討」「枕石」「夜話」「歌川豊廣画」「全二冊」「慶賀堂」

柱心 「枕石夜話「卷之」上（下）」=○丁付。「卷之」は上巻九〇一六丁のみに存。

刊記 「文化五年歳次戊辰春王正月吉日發販」「江戸通油町 村田屋次郎兵衛」「日本橋新

右衛門町 上總屋忠助梓」

構成 卷上二十九丁、卷下三十三丁+広告一丁。

底本 架蔵本に拠る。国会国立図書館本と同様の初板單印本であるが、国会本の表紙は桃

色である。

備考 改題再刻本などの諸板については解題を参照のこと。

## 凡例

一、PDF版は異体字などを含め、可能な限り原本の版面を再現した。

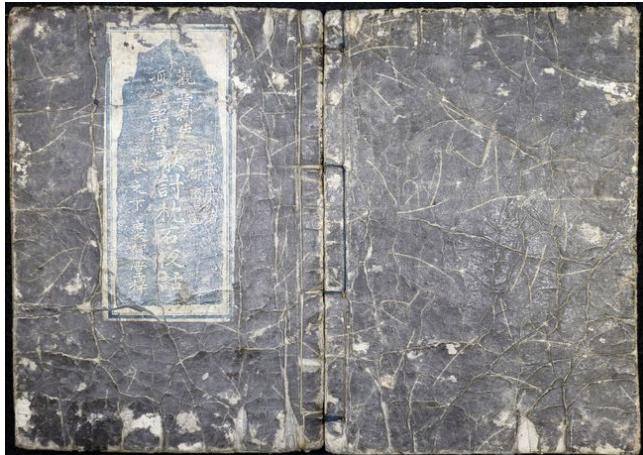
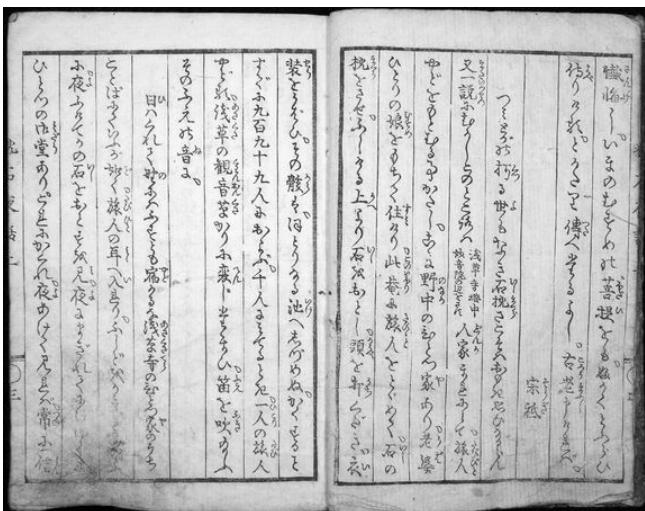
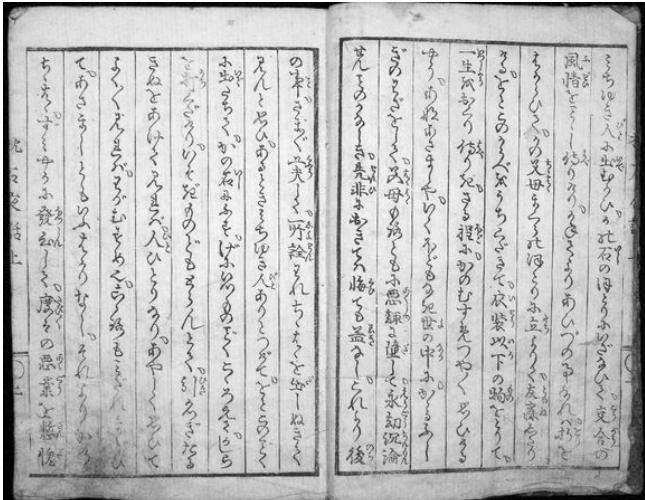
一、変体仮名の「は」のうち、助詞に用いられている「ハ」のみ活かした。

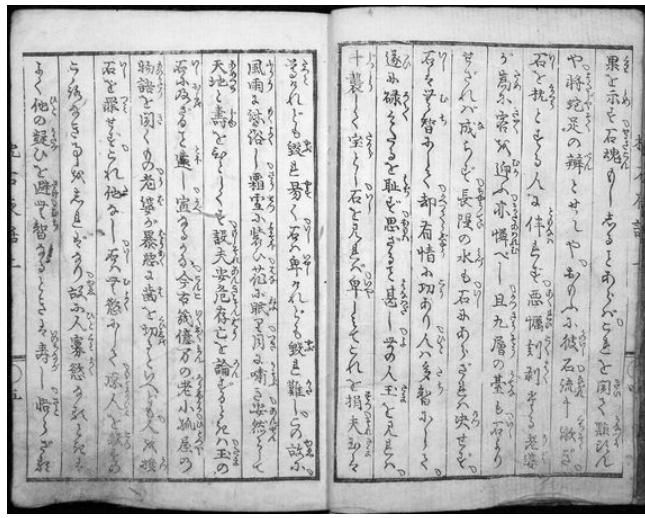
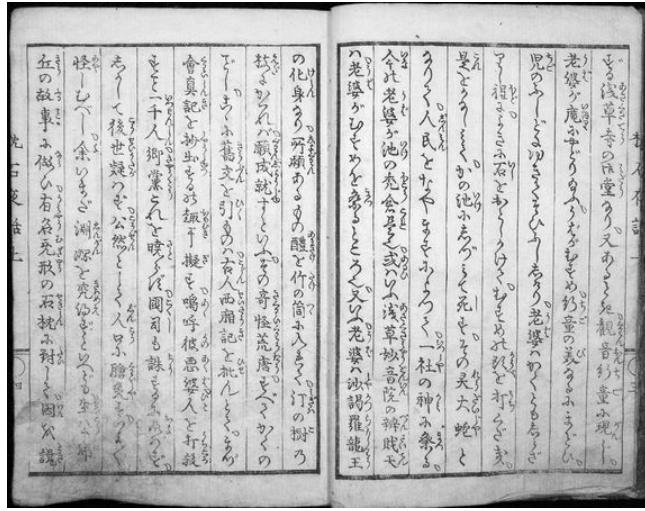
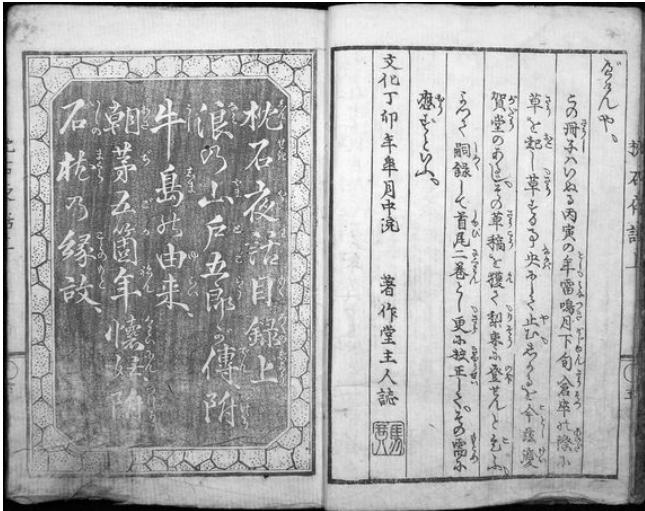
一、html版は、通行字体に直し、段落に分け、会話や心中思惟の部分に「」を附した。

また、序文に用いられている句読点「。」は「。」にした。

一、明らかな衍字や、欠字や句読点を補つた場合など、本文にない部分は「」を入れて明示した。〔〕など。

一、丁数はPDF版にだけ示した。





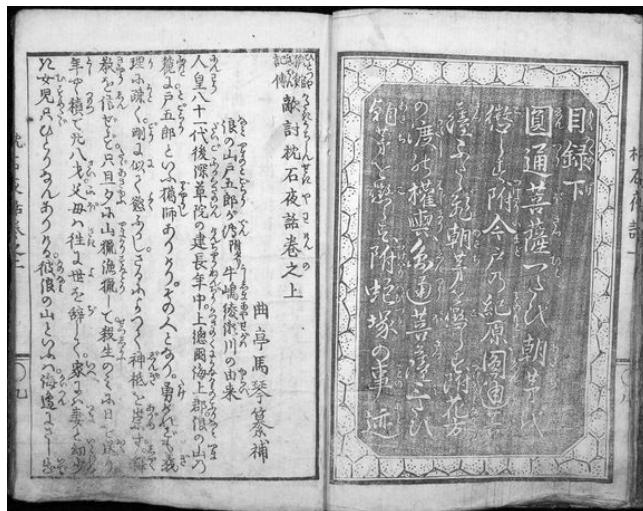
# 本文

## 【自序】

かたきらしんせきやわのいん  
敵討枕石夜話引

【曲亭】

むかし淺草にありといふ。石の枕の奇談ハ。古歌にも見えて。今なほ婦幻の口順とす。しかれどもその傳るところ大同小異。亦全璧を見ず。その一二をいはゞ。宗祇法師が『回國記』に。淺草といふ所にとまりつるに。この里のほとりに石枕といへる。ふしぎなる石あり。その故をたづねければ。中比の事にやありけん。なまざふらひ侍り。むすめを一人もち侍りき。よし。かの石のほとりにいざなひて。交合の風情をことし侍りけり。かねてよりあひづの事なれば。折をはからひて。かの父母まくらのほとりに立よりて。友寐したりける。をとこのかうべをうちくだきて。衣装以下の物をとりて。一生をくり侍りき。さる程に。かのむすめつや／＼思ひけるやう。「あなあさましや。いくほどもなき世の中に。かゝるふしぎのわざをし



て。父母もろともに悪趣に墮して。永劫沉淪せんことのかなしき。先非におきてハ悔ても益  
なし。これより後』<sup>のち</sup> の事。さまざま工夫して。所詮われちゝはゝを出しぬきて見ん」と思ひ。  
あるとき「みちゆき人あり」とつげて。をとこの「ごとくに出たちて。かの石にふす。げにいつ  
ものごとく」ゝろえて。かしらを打くだけり。いそぎものどもとらんとて。引かつぎたるきぬ  
をあけて見れバ。人ひとりなり。あやしく思ひてよくくへ見れバ。わがむすめ也。こゝろもみ  
だれまどひて。あさましともいふはかりなし。それよりかのちゝはゝ。すみやかに發心して。  
度々の悪業を懲愧』<sup>あくこう</sup>『懺悔し、いまのむすめの菩提をも。ふかくとふらひ侍りける。とかたり  
傳へたるよし。古老申けれバ。

宗祇

つみとがの朽る世もなき石枕さこそハおもき思ひなるらん

又一説にむかしこのところハ淺草寺塔中人家まれにして。旅人やどをもとむる事かたし。  
こゝに野中のひとつ家あり。老婆ひとりの娘をもちて住けり。此菴に旅人をとゞめて。石の  
枕をさせ。ふしける上より石をおとし。頭を打くだき。衣』<sup>い</sup> 装をうばひ。その骸は。ほとり  
なる池へしづめぬ。かくすることすでに九百九十九人におよぶ。千人みてるとき。一人の旅  
人やどる。淺草の觀音草かりに変じたまひ。笛を吹給ふそのふえの音。

日ハくれて野にハふすとも宿かるな淺草寺のひとつ家のうち

ことばにていふが如く。旅人の耳へ入れり。ふしどをかえてうかゞふに。夜ふけてかの石を  
おとすを見。夜にまぎれてにげゆくに。ひとつの御堂あり。これにかくれ。夜あけて見れバ。  
常に信』<sup>しん</sup> ずる淺草寺の御堂なり。又あるとき。觀音行童に現じ。老婆が庵にやどり給ふ。う  
ばがむすめ。行童の美なるにまどひ。児のふしどにゆきてそひふしけり。老婆ハかくとも  
しらざりし程に。よきに石をおとしかけて。むすめの頭を打くだき。是をかなしみて。かの  
池にしづみて死す。その靈大蛇となりて。人民をなやますによつて。一社の神に祭る。今  
の老婆が池の糀倉是也。或ハいふ淺草妙音院の辨財天ハ。老婆がむすめを祭るところ也。又い  
ふ。老婆ハ沙謁羅龍王』<sup>けいら</sup> の化身なり。所願あるもの體を竹の筒に入れて。江の樹の枝にかく  
れバ。願成就すといふ。その奇怪荒唐。すべてかくのごとし。こゝに舊文を引ものハ。古人

『西廂記』を批んとて、まづ『會真記』を抄出するの趣に擬す。嗚呼彼悪婆、人を打殺すこ  
と一千人。郷黨これを曉らず。國司も誅するに及はず。しかして後世疑はず。公然として人口  
に膾炙す。いよ／＼怪しむべし。余いまだ淵源を究得すといへども。生公虎丘の故事に做ひ。  
有名无姓の石枕に對して。因を説果を示す。石魂もししることあらバ。これを聞いて點頭んや。  
將蛇足の辨とせんや。おもふに彼石、流に漱ぎ。石を枕とする人に伴れず。惡懾刻剥たる  
老婆が為に客を迎ふ。亦憐べし。且九層の臺も。石よりせざれば成らず。長隄の水も。石に  
あらざれハ決せず。石は無智にして。却有情に功あり。人ハ多智にして。遂に碌々たるを耻  
ず。思ざること甚し。世の人玉を見れハ。十襲して宝とし。石を見れバ。卑しみてこれを損。  
夫玉は』<sup>4</sup> 尊けれども毀れ易く。石ハ卑けれども毀れ難し。この故に。風雨に沐浴し。霜雪に  
装ひ。花に眠り。月に嘯き。安然として天地と壽をひとしくす。設夫安危存亡を論ずるときハ。  
玉の石に及ざること遠し。宜なるかな。今古幾億万の老子。孤屋の物語を聞くもの。老婆が  
暴惡に歯を切るといへども。人を撲石を罪せず。これ他なし。石ハ無慾にして。原人を殺す  
のこゝろなき事をすればなり。故に人寡慾なるときは。よく他の疑ひを避。無智なるときは  
いのちなが。悟らざる』<sup>5</sup> べけんや。

この冊子ハいぬる丙寅の年。雷鳴月下旬倉卒の際に草を起し。草する事央にして止む。  
しかるを今茲慶賀堂のあるじ。その草稿を獲て。梨棗に登せんと乞ふ。よつて嗣錄して  
首尾一巻とし。更に校正して。その需に應すといふ。

文化丁卯年臯月中浣

著作堂主人誌

續

5

枕石夜話目録上  
浪の山戸五郎が傳附  
牛島の由来  
朝茅五箇年懷妊附  
石枕の縁故』

## 【口絵第一図】

戒之戒之出乎爾者反乎爾者也

宿かりて夜には寐すともまくらすな淺くさ野路のひとつ家の石 よみ人しらす』<sup>6</sup>』

## 【口絵第二図】

將以鬱鐘

駒かたに水かふ水菜つむ頃ハ牛嶋のあし角くみにけり 裳笠』<sup>7</sup>』

もくろくのげ  
目録下

圓通菩薩一たび朝茅を懲らす、附 今戸の紀原。

圓通菩薩ふたゝび朝茅を懲らす、附 花方の渡の権輿。

圓通菩薩三たび朝茅を懲らす、附 蛇塚の事迹』<sup>8</sup>

孤館  
記傳  
敵討枕石夜話巻之上

曲亭馬琴纂補

浪の山戸五郎が傳附タリ牛嶋綏瀬川の由来

人皇八十一代後深草院の建長年中。上總國海上郡。浪の山の麓に。戸五郎といふ獨師あ

りけり。その人となり。勇けれども義理に疎く。剛に似て慾ふかし。さるによつて神祇を崇す。釋教を信ぜず。只旦夕に山獵漁獵して。殺生のみに日を送り。年やゝ積て升八才。父母ハ往に世を辞して。家にハ妻と幼少き女児只ひとりなんありける。彼浪の山といふ

ハ。海邊にさし出たる高山なれば。戸五郎ハおのづから海陸の所作に馴て。心の隨に举止けり。しかるにある日の夕ぐれに。戸五郎ハわが住む山蔭にて。鹿なりと思ひ悞り。回國の行者を射て殺しぬ。さすがに膽太き男なれども。こよなき過しつと慌て。さま／＼にいはれ共。既に縡断てせんすべなし。さてその筈をひらきて見るに。夏冬の衣服二ツ三ツと。一冊の度牒ありて。常陸國久慈郡。大門村。枕石寺の新發意。圓石。俗姓ハ同郡同村

の農民。

石濱要太郎が父要助とあり。抑常陸國枕石寺の由來を尋るに。

開基の僧を道圓坊と号す。元是江州蒲生郡。日野右大將頼秀卿の苗裔に<sup>9</sup>して。左衛門尉と稱す。故あつて

常州久慈郡大門村に住居せしに。ある日。何がし上人とか聞えたる。聖僧來たつて一宿を乞給ふを。主人たえて差引ず。よつて上人ハ門方なる石を枕として臥給ふ。かくてその夜ある

じの夢に。老僧告ていはく。「阿弥陀如來今夜汝が門前に在す。などて歎待奉らざる。」と

いふ声に驚き覺。ふかく心に怪みつゝ。立出で見れハ。果して一人の僧石に臥たるが。その

呼吸皆稱名に聞えし程に。且恐れ且歎び。迎入れて厚く饗應し。感慨のあまり。終に上人の

弟子となりつ。薙髮して道圓と法号し。おのが宅地をもて一箇寺を建立す。今枕石寺ハ

すなはちは是なり。この寺中古内田村に移り。今又川井村にうつるといふ。この事人口に膾炙して。近國にかくれなき。活佛靈場

の法師を殺したれハ。戸五郎ハ一しほ身の悞を悔欺くべきに。さもなくして。その人の腰の

まはりをかい探りつゝ急地慾心發り。手ばやくその路銀を奪ひとりて。屍を濱辺にもて出て出で

押流し。そらしらぬ顔して居たりける。しかれども好夏ハ門を出ること遅く。悪夏千里に走

ること速き道理なれバ。誰いふともなく「戸五郎ハ枕石寺の旅僧を殺して。夥の金を奪とつ

たり」とて隣りの郷黨いひもて傳へ。もつはら口順とせし程に戸五郎<sup>10</sup>もれ聞て驚き怕れ。

「いな／＼こゝに虚々とあらバ。よき事あらじ」と思案し。俄頃に女房綾瀬と。女児朝茅を

将て。當國を逐電し。武藏國浅草に來て。宮戸川原に住家を求め。ふたゝび獵師の所行をせ

ず。船とる事も人に勝れたるに彼圓石法師が路銀も。思ひの外あまたありしをもて。これを

卒錢として一艘の海舟を造り。伊豆相模へ赴きて。物産を交易するを活業とすこのころまでハ。淺草の邊まで。一圓の入海にて。緑波渺々たる宮戸川原にハ。夥の獵師軒を並ベ。又

海舟をもて。世をわたるものもありしとぞ。

さる程に戸五郎ハ「挿絵第一図」<sup>11</sup>こゝに住馴て。よろづ昔に立まさり。何事も乏しきに

苦しまず。これが甥に鴨八といふもの。はやく父母を喪ひてよるべなきまゝに。潛に上總より尋來りければ。彼をとゞめて船を乗ならはし只管に稼ぎつるに。件の鴨八。年十八九のこ

り尋來りければ。彼をとゞめて船を乗ならはし只管に稼ぎつるに。件の鴨八。年十八九のころより酒を嗜み色を好みて。過分の錢を遣うしなひしかば。戸五郎大に怒りて追ひ出せしを。

浦人等さまぐに勧解て鴨八を伴ひ來たれハ。戸五郎も彼なくてハ物の缺ることもおほく。



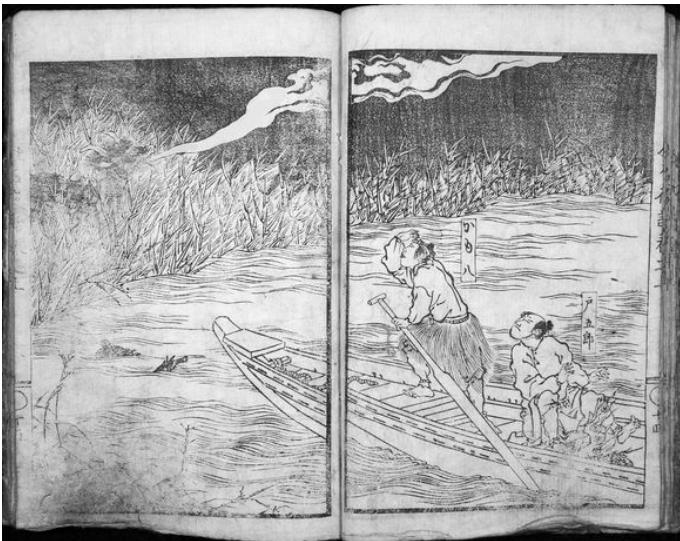
さし當て翌ハ伊豆へ赴くとて。船を賣發おきつれハ。倍話らるゝを幸にして。いたくいひ懲らし。まず此度ハとて怨しけり。

かくて』戸五郎ハ。詰朝纜を解し。みづから船頭して。豆州下田浦に到りて。買賣の事をなし果。既に帰帆に赴けバ。この日殊さらに追風よくて。相模灘三十六里を。只一瞬に走らするに。怪しいかな船ハ猛に停て。膠もてつけたることく。いかに船をとりなほせども行ず。戸五郎ハいふもさら也。水主舵取が打見あはする顔ハ。海面よりも青く。ふかく怕れて物いふことなし。吐嗟この船自今覆るかと見るところに。しばしこそありけれ。船ハ舊のごとく走ること。先よりもなは速く。その夜の明かたに。宮戸川へ帰着したりければ、衆皆はじめて活たるゝちし。さてもから』<sup>12</sup>き命拾へりとて罵あへバ。戸五郎がいふやう。「凡決然たる走り船を出るもの。その膂力量がたし。われこの年來。いく度か渡海すれども。いまだかゝる奇怪にあはず。船の底に物こそあらめ。展檢よかし」とて。人を入れて撈らするに。果して船底にかゝれるものあり。とかくして抜とりつゝもて来るを。戸五郎手にとりて

つら／＼見るに。獸の角とおぼしくて。その長さ一尺にあまり。肉著の毛。針のごとく。水牛の角に似て。尖きこといふべうもあらず。「こハ何ものゝ角ならん。思ふに。此もの水中に遊居たるを。わが船その角に乗りかけたれバ。忽地船底をつぬきて。これが爲に抑苗せられしもの歟。しかれども順風に時を得て。船のちから疾かりしかハ。その角折れて覆さるゝに至らず。只一つの角に挂ながら。○従容として。走り船を出めたる怪力。比ふべきにものなし。このもの倘怒て身を動ざバ。吾儕活てかへるものハ一人もあるまじ。嗚呼危かな。危かりし」と嗟嘆すれバみな耳を側て舌を吐。驚き思はざるハなかりけり。この事かくれなかりし程に彼此の老弱聞傳へ。旦より夕にいたるまで。戸五郎が門に群集して。「彼角を見ん」と請もの。更に絶間もあらず。戸五郎も頻に是を賣弄して。高運の』<sup>13</sup> 〈挿絵第二図〉

』<sup>14</sup>  
』

〈挿絵第二図〉



ほどを自誇し。「價よく買人もあらハ。与べし」とて。もつはら得意の人をたづねける。折しもこの濱に。一人の老翁ありて。たま／＼戸五郎が家に杖を曳けの角を見て。主人に

○ジマン

ほどを自誇し。「價よく買人もあらハ。与べし」とて。もつはら得意の人をたづねける。

折しもこの濱に。

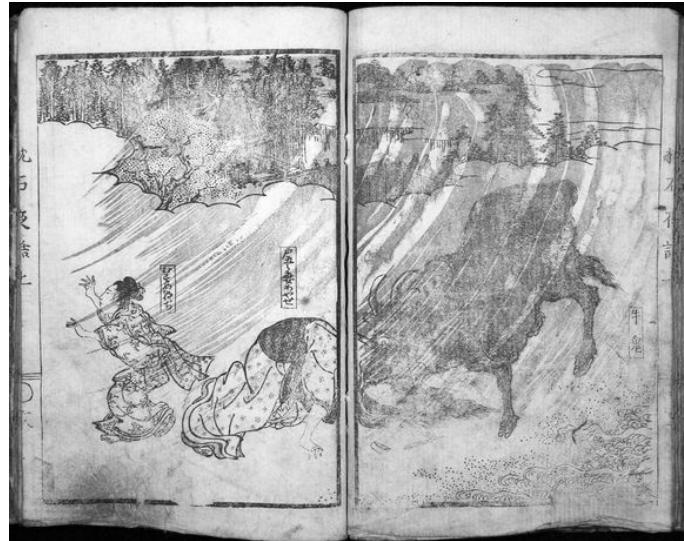
一人の老翁ありて。

たま／＼戸五郎が家に杖を曳けの角を見て。

主人に

さゝやきけるハ。「愚老のわかゝりしとき。ある博士に聞ることあり。凡江海溺死の人。冤を含むときハ。魂魄化して獸となる。これを鬼牛といふ。その狀尋常の牛より大きくて。膂力又水牛に百倍し。常に水中に沈倫して。人に見らるゝことなし。もしこれを見るときハ。その人立地に死するといへり。今彼を思ひ是を見るにこは全く鬼牛の角なるべし。はやく舊の海底に返さず。却て利<sup>15</sup>を射んと計較給はゞ。遠らずして崇あらん。とかく海に投て。その舊に返し給へ」とて。いと叮嚀に諫るに。戸五郎更に信用せず。「こハわれを誑て。かく愛たきを捨てさせ。竊に拾ひとりて。おのれが利をはかるもの也」と思ひしかバ。却老翁を恨みさんぐに罵りて。この後ハ寄せもつけず。

しかるにこの濱の南に當て。さゝやかなる嶋あり。そのころ夜なく。彼処に牛の吼声してけり。元来人も住ず。牛馬六畜を養おく処にもあらぬに。牛の鳴こと怪しけれバ。天の明るを俟て。浦人等小舟を泛てゆきて見るに。たえて物もなし。縁故いよ不審とて。戸毎にふかくおそれ慎み。夜網するものなかりつるに。十日ばかりを経て。牛の鳴ことハ止ぬ。時に建長三年三月六日。戸五郎が妻綾瀬ハ。金龍山の花を見んとて。今茲十二才になりける。女児浅茅を將て。淺草寺に詣。まづ觀世音を拝して。やがて卒堂の後なる。食堂のほとりまで到る折しもあれ。俄頃に海鳴り風吹おろし。その容牛のぞときもの。忽然として走り來つ。直に角をもて綾瀬が胸さかをつらぬき。これを頃にふり被つゝ。淺茅に毒氣を數回吹かけ。只一跳に食堂に突て入るに。こゝに<sup>16</sup>集會る法師ばら。驚き怕れて昏絶し。矢庭に死するもの七人。病痾を受て。久しく起ざるもの。升四人に及べり。かゝりける程に境内の衆人。囂塵として奔走し。戸五郎が家に縁由を告来れバ。戸五郎慌忙て。鴨八とゝもにその処へ走りゆけバ。彼牛鬼は。何地ゆきけん迹もなく。綾瀬が屍さへ見えず。只女児朝茅のみ。仰さまに倒れてありしかバ。抱き起してさま／＼に呼いくれど。頓に活べうもあらず。牛のよだれ涎沫かとおぼしきもの。夥頗に吹かけられたるを。拭ひなどして。家に扛もて帰り。薬何くれの事。ます／＼心を竭せしかひありて。その日の夕ぐれに。朝茅やうやく甦生れり。さらバ綾瀬の』<sup>17</sup>挿絵第三図』<sup>17</sup>



尻しりを索たづねんとて。浦人うらびとを相語かたごり。水陸すいりくともに。おちもなく探求さぐりうるに。次の日に到いたりて。向ひなる  
入りえに浮出うきだしければ。これを船ふねに引揚ひきあげ來たりて。野邊のべおくり湫かたの如いとく営いんみけり。  
綾瀬あやせかく非命ひめいに死しし。朝茅あさお又久しく病やまいておこたり果はてざれば。彼かれにつき是これにつき。戸五郎とハ湫あぢき  
なき事のみなれば。さすがに活業なりはにもこゝろす、まず。しばし引籠ひきとりてありけるに。鎌倉かまくら  
へ物産ぶさんを積送づみゆきる日子ひがも。定さだめあることなれば。今度こんどハ甥おひの鴨八かもを。わがかはりに船頭せんとうさせて。  
彼かれ地おもむかへ赴おもむかしたるに。帰り來かへべき時ときハ遙はるかに立たども。たえて音おとつれもなし。あまりに心こころもとなく  
て。人ひとを遣つかはして叟おじいの爲体ためを探聞さかうするに。その『人立ひとたかへり』と告つげにければ。戸五郎と聞きて呆あきれ果はて、且怒かのり且罵ののれども。今ハ世渡よわた  
ひ。これを贖つくなふにせんすべやなかりけん。水主みずし舵取かどとり等らにもしらせず。船擔ふなにハさらなり。船さ  
へ沽却うりしらなして。逐電ちくでんしたり」と告つげにければ。戸五郎と聞きて呆あきれ果はて、且怒かのり且罵ののれども。今ハ世渡よわた  
る膾かいをうしなへバ。別に施ほどこすべき謀はかりことなく。僅半年はつかはんねんあまりに身上しんじょう衰微すいびして。朝あたに煙絕けふりたへて夕ゆふ  
の糧かずとほし乏ほどかりつる程ていに。はじめて老翁おきながいひし事を思あたひ當あたり。彼角かのづをとり捨すてんとて。まづ箱はこ  
蓋ふたを開ひらきて見るに。角つのはうせてゆく処ところをしらず是これ又一ふしきの不思議ふしき也けり。

しかのみならず。加旃なほ怪しきハ。この日より浅茅が病著おこたりて。心持ハ生平にかはることなく見ゆれど。腹のあたりふくよかに』なりて。その容結胎ものゝ如し。しかれども「はつかに十二才なる少女が。懷胎すべきやうハあらず。是ハ牛鬼の涎沫。彼が咽喉に入りしより。病をなすにこそ」など推量て。ものをも厭はず。医療さまぐに心を用れども。露ばかりも験なく。日に／＼に腹ハ大きやかになりしかバ。醫師も「全く懷妊ならん」といふ。とかくして十月あまりを経て。腹なる子頻に動き。今も産れ出べき氣色なれば。親も疎ぎも。「古今未曾有の椿萱なり」とて。只この事のみを口順とするに。縁故をよくしれるものハ。「さもこそあらめ。彼戸五郎ハ。故郷にて回國の行者を殺し。夥の路銀を奪ひとりて。屍を海へ衝流し。この浦に脱<sup>19</sup>來りて。船長となりけるも。よからぬ卒錢なるものを。いかで久しく栄ゆへき。曩に伊豆の海にて。船底をつらぬきたる獸の角も。老翁がいへるごとく。彼行者が冤魂。化して鬼牛となりて。仇を執んとするに。戸五郎が命運いまだ竭ざれば。必死を脱れたりけるを。彼曉得らずして。却その角を賣弄し。よき價に賣らん事をはかりしかバ。忽地これが爲に。女房綾瀬を殺され。今又女児浅茅。奇痛を受て。因果観面の道理を示すもの歟。おぞるべし／＼と密語ぬ。宴に殘忍狼戾なる。戸五郎も。この風声をもれ聞に。みな犇々と思ひ當る事のみなれバ。猛にものゝおそろしく』おぼえて。熟思案するに。「蟻するものハ發する期あり。盈るものは溢るゝ時あり。浅茅有身て。十月にあまり。分娩する氣色なしといへども。終にハ鬼子などを産こともあらバ。われハ人の前へ頭をも出がたく。女児ハ殊ざらに。一生人間の交をなしがたかるべし。しかるに虚々とこの處にありとも。久後實にたのもしげなし。庶莫<sup>20</sup>浅茅を残しあきてはやくわが身を躲さんにハ。おのづから人も憐み。是彼に養を得バ。親子もろともにありて。世の胡慮となるにハ勝りなん。これ父子両全をなすの謀<sup>はかり</sup>なめり」とて。潛に心を決し。浅茅にも』告ずして次の日何地ともなく逃亡けり。かゝりしかバ戸五郎が思ふに達はず。近隣の人。浅茅が父に損られて。昼夜泣まどふを見て。ふかく憐み。或は飯を饋り。或ハ錢を与て飢渴を救ひ。是よりして冬ハ海苔を漉し。春ハ貝を拾はせなどするに。おのづから口を糊に事足りぬ。

按するに。東鑑建長三年三月六日の記に云。この日牛の如きもの淺艸寺に走り入る。時に

じきだう あつま ところ じぞう こう くだん くわい いにん じまう たちとこ やまひ うけ まつわ いま うしま けんやう さんねん かのうしおに また古者の話に。今牛嶋ハ。建長三年。彼牛鬼の。夜な／＼吼たる処也。よつて牛嶋と号といふ。しかば綾瀬が屍の浮たる入江を。後世綾瀬川と稱る歟。好古看官後勘あるべし。

（一）一ツ家の少女五箇年懷妊附タリ 野寺長者石枕の縁故

憂苦の中にある人ハ。爪伸髪の枯るゝをおぼえず。戸五郎が女児浅茅ハ。既に一八の春をむかへ。顔色も又人みなれど。彼が畜病におそれて。「妻にせん」といふものもなく。剩そのほとりなる家は。夜毎に魘れて。快く寐ることを得ねバ。一人轉宅し。一人居を移して。後にハ浅茅が住る家のみ残りし<sup>21</sup>かバ。誰いふともなく。浅草の一ツ家と呼倣せり。かくて浅茅ハ懷妊五箇年に及び。今茲三月六日の夜。安産して。女子を出産す。豫てはわれも人も。「いかなる鬼子を産べきか」と思ひつるに。さへなくして。うまれし児ハ玉のことく。忽地大きやかになりて。一月が程によく歩行。よくものいひて。尋常四五才の仔子に異ならず。これを駒方と名つけて。母の寵愛比なかりき。しかるに朝茅ハ。子を挙てより。心ざましくなりて。膂力は丈夫を三人も四人もあはせたらんがごとくにて。食れども飽くことなく。あはれゆくすゑ。駒方を富る家の婦ともなざめと思ひて』（挿絵第四図）<sup>22</sup>人の誹誘をかへり見ず。道理に叛きても。只おのれを利せんとするを見て。はじめ憐みたる人もいたく憎て交らず。さるによつて淺茅ハ。浦曲の稼をなすことかなはねバ。廣澤村の農家などに傭れて。日に／＼彼處に到り。田刈糲を挽。僅なる貢錢を。親子が命綱にして世をわたるに。それも女児駒方が絆となりて。人なみにハようせず。頃しも神無月の上旬。簾輪より帰るにて。駒方を背負ひ。浅草寺の北方なる。田畔を過るに。駒方が頻に泣て已ざれバ。扛おろしつゝ。道次なる株に尻をかけて。しばし乳汁を飲すれば。日も早向暮とす。こゝに一ツ家の<sup>23</sup>長者が石の枕といふものありて。歟は常の枕に異ならねど。その石光澤ありて玉の如し。もしこれを取て帰るものあれバ。その人必崇をうけて。いく程もなく家破れ。子孫断絶すとて。今ハこれを取らんとするものもなけれど。なほ「旅人なんだ。縁故をしらで。さる正な「き」事をし。おもはずも禍にあはんか」とおもひはかり。里人等札をそのほとりに建て。



縁由を書写おきぬ。

抑むかしこの処に野寺の長者とて、いと富る人ありけり。升餘町に屋舗を構て。他人の軒をまじへず。故に時の人口順て。一ツ家の長者とも。又枕の長者ともいへり。件の長者。夏日の炎暑に苦み。一ツの奇石を得て。枕に刻せ。これを首して睡るに。涼風耳のほとりより起りて。三伏の暑き夕も。たえて寐がたきといふことなし。又冬ハこの枕をするに。いと温にして。風臥房に入らず。よつてこれを愛玩ふこと既に久しう。しかれども盛者必衰。誰かハ脱るべき。長者の没後。その家断滅に及び。貯たる所の財宝。悉く他人の有となるに。この石枕を買し人。崇あるをもて。全く舊の主の愛情するにこそと怕れ思ひて。○モトノヤシキ故宅のほとりに捨るを。又拾ひとる人いよ／＼崇を受るによつて。その後ハこれを取らんとするものなりけり。この事洛へも聞たりけん。』<sup>24</sup> 白河院の御製に  
武藏にハ霞が関や一ツ家の石の枕や野寺あるてふ  
按するに。今浅草反圃。慶印寺の石橋を枕橋と称ふ。古老人の説に。『件の石の枕はこの処にあ

り。この邊野寺長者が宅地なりし」といふよし。或語りぬ。

是ハさておき。淺茅ハしばし其処に憩ひて。日來見なれ聞馴たる。石の枕を。今又熟視する。に。いと愛すべきものなれば。忽地貪婪の心發り。「よしやこの枕ゆゑに。久後いかなる崇にあはゞあへ。潜にもて帰りて。縁故をしらざるものに賣りて。よき價を得バ。生涯貧たり老死るにハ勝りなん。さへとてほとりちかく立より」しか。いなくほしと思ふハわれのみかハ。これを取らざるハ命の惜きにこそ。われも命ハ惜きものを。とおもひかへして。走り退んとせしが。又思ふやう。「暗夜にものを疑へバ。目に鬼を見るとぞいふなる。人此枕を取れバ崇ありと聞怕するが故に。わが心もて崇にもあふなれ。これを取りて。崇あるも。崇なきも。すべてわが心にあり。怕るゝに足らず」とひとりごち。やをら駒方を抱おろして。まづ掛け稻をよりあはしつゝ。石枕の真中を括り。いと軽らかに引提て。遂に駒方が手を引て。帰去らんとする折しも。忽地稻むらの蔭より。一人の乞食走り出て。淺茅が帶のはしを楚と引とめ。「この婦。などてかく」<sup>25</sup> 膽の太き。われ嚮よりこゝにありて。汝が盜するをよく見たり。もしわれにその所得をわけ。錢あらばはやくあたへよ。なしといはゞ。その蔽衣。いで脱せん」とて。いきまきあらく罵れバ。あさぢ大に怒りて。枕を括りたる索のはしを口に含。ひだりのて左手をはたらかして。丁とぶり拂ふを。乞食はなほ透間もなく打てかゝれハ。閃りとかい潜りつゝ。臂のあたりを握畠。隈なき夕月の影に。はじめて顔を見あわするに。この乞食ハ。五箇年已前に逐電したる。従才鴨八にてありしかば。迭に「こへいかに」と驚きて。摑みかゝりし拳も和ぎ。やがて左右に引退きて。朝茅まづ彼がこゝにある故を問バ。鴨八答て。』<sup>26</sup> 『挿絵第五図』<sup>27</sup> 「われ稚きより叔父の養育を得たれども。朝夕に罵らるゝが腹たゝしかりつるに。たまゝ叔父にかはりて。鎌倉へ赴くことを許され。只是鳥の籠を遣ひし程に。商物ハいふもさるこゝちし。彼地に逗留の間大磯粧坂にかよひて。夥の錢を遣ひし程に。商物ハいふもさら也。船さへ沽却して。なほ処をも定ず遊びありき。一年も経ざるに。手に一文の錢もなくなりしかば。この三四年ハ。伊勢の鳥羽にありて。水主の飛乗して世をわたりけるに近曾人ともがあらがひして。右の腕を折き。思ふまゝに船を漕ことかなはず。彼処にありて。療治せんことも。心に任せざれば。人をたのみて叔父に勧解。勘當を<sup>28</sup> ゆるさればやと思ひて。路



すがら乞食しつゝ。こゝまで来れり」といふ。朝茅聞て思ふやう。「われ父に損られ。浦人に疎れて。世をわたるに便なし。只恨を捨て。この人を救ひ。もろともに事をはからばや」と思按し。やゝ顔色を和らげて。別後の情を述。父戸五郎か往方なくなりしより。その身懷胎五年に及びて。この春女児駒方を産たる首尾を。審にものかたり。さていふやう。「わが家のおとろへたるハ。御身がなせし事にて。父もそれゆゑにこそ。世をバ捨給ひけめ。しかれバ御身に冤ハあれど。徳の報ふべきなし。さへいへ諺にも。『雪中に炭を送るハ是骨肉。他人ハ屋上の霜をはらはず』といふ。われと御身』とは従弟也。いかでその飢渴を救さるべき。夫舵なき船ハゆかず。乗らざる馬ハ走らず。われに齎眉べき夫なく。身ひとつにして幼稚きものを養育バ。舵なき船乗らざる馬にひとし。御身わが父の高恩をおもひ。又過の大なるを悔ひ。今よりして粉骨を竭し。われと女児を養ひ給はゞ。われ又御身を夫とかしつき齎眉て。もろ共に富をはかるべし。この事うけ引給ふにか」といへバ。鴨八大に歎びて一議にも及ず。」ハわが庶幾ところ也。縊老ゆく後までも。諾し言葉ハ叛かじ」と誓ひつゝ。う

ちつれだちて一ツ家に帰り。その夜妹背の締をなしつ。久後ハいざしらず。いと陸しくぞ見へ  
にける。さらぬだに人々な朝茅が<sup>28</sup>邪智ふかきを憎むなるに。今又「鴨八が立帰りて。夫婦  
となりぬ」と聞て。「こハ虎に翼をそえたり。彼等二人うちよらバ。いかなる悪事を計較らん  
とて。いよく疎み。ますく怕れて。路にゆきあふ時ハこれを避てものいはず。

さるによつて鴨八が腕の痛全く愈て。彼此を走りまはれども。海船漁獵の稼にハ。たえて  
傭ふ人なかりけり。さればとて奉錢もあらねバ。別になすべき活業もなく。慄に一人の口の  
み殖て。鴨八が帰り来ざる以前にハ劣れり。「かくてハ」とて夫婦相語て。彼石の枕を賣らん  
とするに。「縁故をしれる人にハ。賣べうもあらず。よしやしらざる人ありとも。虚々と賣弄  
して。偷來れる」事發覺なバ。毛を吹疵を求る也」と。思ひたゆたひて。これも又頓にハ物  
の用にたゞ。『とせんかくせん』とて。頭を病し額をつきあはしつゝ。智恵てふ智恵をふ  
るへども。轍魚の泥に吻ぐとく。内には施べき謀なく。外にハ救ふべき人もなかりける  
とぞ。

### 敵討枕石夜話卷之上終」<sup>29</sup>

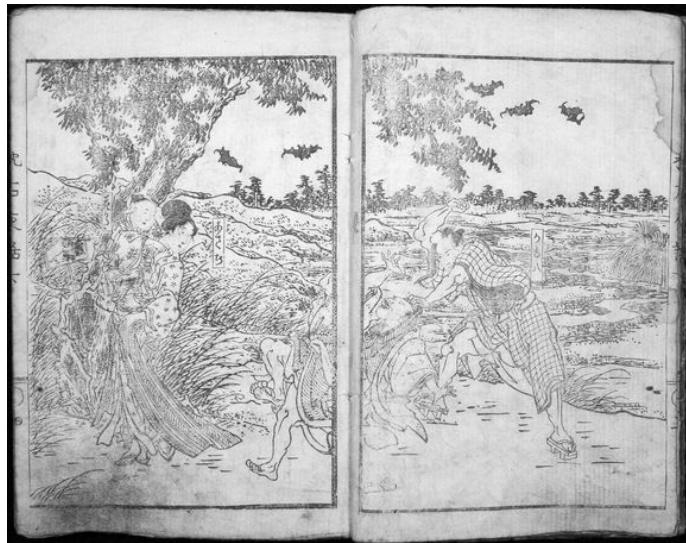
孤館記傳敵討枕石夜話卷之下

### 曲亭馬琴纂補

#### (三) 圓通菩薩一たび朝茅を懲らす 附 淺草今戸の紀原

そのとき朝茅しばし尋思して。「あなもどかしや。一枚の水は。十人の渴をとゞめがたく。  
半盞の油ハ。長夜を明すに足らず。わが夫婦萬苦千辛して稼とも。させる奉錢さへなきに。  
邂逅僅なる錢を得て。ものゝ腹に満るものかハ。わらハ日來簞輪へかよひて。曛昏に帰り來  
る毎に。里の壯僕がものいひかけて。いらへよくせバ。『調戯もしつべき氣色を見せし事おほか  
り。これにつきて謀あり。われ箇様にすべし。御身又如此ごとにし給へ』とて。耳の根に  
口をさしよせて説示せバ。鴨八聞て莞然とうち笑み。「この謀究て好し。さらばしかし給  
へ」といふ。こゝに於て朝茅ハ。化粧髪結などして。洗濯衣を著更。女児駒歎をかき抱きて。  
夕ぐれ毎に。廣澤。下谷。鳥越の村稍尽廻。すべてかけはなれたるところへを。往つ還り

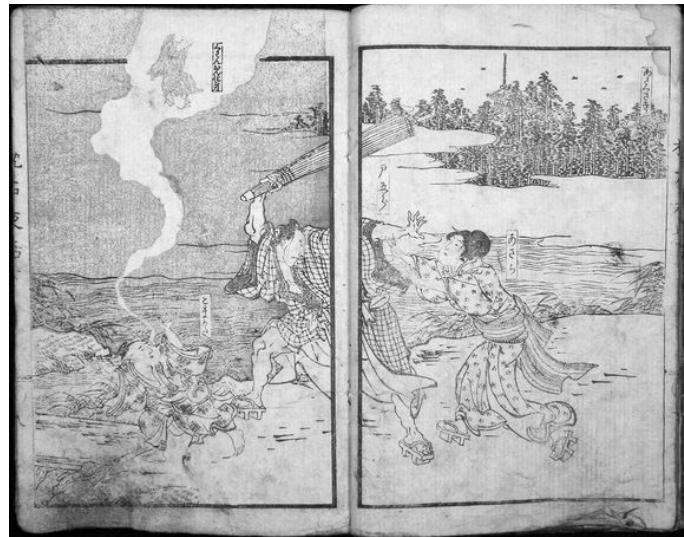
つ。路に惑ひたるおもゝちするに。色好みなる里の壯俊。ゆきかゝりて。その形勢を不審み。「あね御何地へゆき給ふ。路に惑ひ給へるにや。送りてまゐらせんか」といふに。朝茅苔て。「わが身ハ如此のところのものなるが。」<sup>1</sup>近曾夫なくなりて。たつきなく侍り。堀間村にはハ由縁の人もあれば。其所をこゝろさして行侍るが。常にハイと疎かりければ。路も定かにはしらず。殊ざらに日ハ暮かゝりて。いかにともすべなし。堀間村までハ。なほいかばかりの路程侍るやらん。」と誠しやかに問。壯俊聞て。いよゝちかくあゆみより。「堀間村ハ。あなたなる川一條を隔て。湯嶋よりハ西。芝崎よりハ東南に當れり。しかハあれど。日も既にくれられ巴。渡守も船ハ出さず。今宵ハわが村に歇り給へ。あるじしまゐらせん」とて。信々しく聞ゆれば。朝茅ハうれしみたる氣色にて。「御身ハ年紀もいとわかく見え」給ふに情ある人にて在す。女子と生れつるおもひでに。かゝる夫をもたらましかば。よしや辛苦世をわたるとも。憂とハ思ひ侍らじ」といひかけて。莞尔と笑みつゝ。うち見あげたる面影に。男ハ胸さへさわぎて。忽地によからぬ心を發し。後方前方。左見右見るに。來る人もなし。「さらバ郷導をいたさんに。こなたへ來給へ」とて袖を引バ。帶さへさらくと解て。やゝみだりがはしきに及んとする折しも。鴨八ハ纏より並松の蔭にかくろひ居て腕まくりし。「時分ハよし」と跳り出。件の壯俊が頂髪を。無手とかい禰で動せず。斜に響く声をふり立。「この白徒。かく人の妻に調戯るゝハ。命に」<sup>2</sup>かけがえやある。われも又睾丸もてるものを。「一人ながらうちかさねて四段にせずハ。世の胡慮となりぬべし。あら獨し腹たゝし。覚期せよ」といきまきつゝ。左手を伸して。朝茅が頭髪をしかと拿。おなじ所へ引よすれバ。駒歎ハこれに怕れ。よゝと泣て曰ず。壯俊ハ鴨八に頂髪をとられて。活たる心持もなく。おそるゝいふやう。「われハ全く密夫にあらず。この婦人。路に惑ひたれバ。郷導して給はれと宜はするに黙止がたくて。假初にものをいひたるのみなるに。こハ理不尽なり。」といはせもあへず。鴨八ますゝ声を高し。「汝われを瞽者とや思ふ。瞽者とや思ふ。目今汝」<sup>3</sup>（挿絵第六図）「わが妻に調戯て。今宵ひとつに寐んといひつるを。はや忘れたるか。論より證拠なり。人に路を教るにハ。かならずその帶を解ものか。いふことあらばいへ。聞ん。」と罵りつゝ。足を揚て踏にじり面に睡を吐かくれバ。壯俊ハ朽をしき事限なけれど。庵落の涼に入たれバ。明白に争ふことを得え



ず。朝茅ハこの歎勢を見て。壯俊に對ひ。「などてこの期に及びて。ひとり脱れんとハし給ふ。袖ふりあはするも他生の縁なり。死なバもろともにと思ひ侍るものを。頼しげなきころや」と。声をふるはして怨ずれバ。彼男ハますく呆れ。只顧に勧解れども。鴨八ハかい觸たる手を放さず。それが村に引ずり<sup>4</sup>

ゆかんといふに。いよゝ迷惑し。持あはしたる錢も銀も。悉くとり出し。これをもて扱ふに。鴨八ハ「なほ足らず」とて。衣服さへ剥とりて突放せバ。壯俊ハ贋鼻禪のはしを長く引。枯尾花の中に紛れ入りて。迹をも見せず逃去りぬ。朝茅鴨八ハ。思ふまゝに錢を得てふかく歎び。錢尽れハ欣のごとくするに。折ふしハ彼等が聴にかゝるものあり。それハ皆年わかきものどもなれば。或は父母にしられんことを厭ひ。或ハ主親方にしらせじとする程に。居落とハしりなから。錢を出して無事を抜ひしかば。この事後にハ人もしりて。近郷の壯俊ハ。届狐に妬されな」とて。途に女子と行あふときハ。經に避て聴に係らじとす。こゝをもて悪棍夫婦が較計。やうやくいたづら事となりて。手を空しく帰る夜も多かり。

かくて次の年の秋。朝茅ハ又駒弔を將て。淺草寺の北なる暇道をゆくに。日ハよき程にくれ  
かゝりて。雨肅々と降出たるに。年紀升四五なる法師。傘をかたげつゝ。先にたちてゆく  
あり。朝茅これを見て。忙しく走り著。會釈もせず。傘の内につと入りて。法師を見かへ  
り。「この驟雨に。笠やどりする家もなく。ぬれてゆく身の心苦しさを。あはれとハ見給は  
ずや。世の中を厭ふまでこそかたからめ。假の宿りハゆるし給へ」とて。うち笑みつゝ。傘  
の柄をもち添て。』<sup>5</sup> いと趣ある風情なれバ。彼青道心。忽地に顔を覗うし。「こハわれをバ。  
西行とやおぼすらん。歌よむすべハしらねども。恋哥ならバかへしすべし。教てたびてんや  
といへバ。「そハこなたより願ふにこそ。闇きよりくらきに惑ふを。導き給ひてよ」といふ  
間に。雨早晩歇て。夕月の影眉のごとくなれと。傘をたゞむにこゝろもつかず。おし並び  
吐嗟と。傘投捨。帶のあたりを抱きとむるに。鳴八後より跟來りて。「大盜」と罵もあへず。  
走りかゝつて。瓢に似たる。法師天窓をゆがむばかりに破と打バ。法師ハ「おほぬすびと  
びて。泥の中へ倒るゝを。起しもたてず打ほどに。忽地に息たえたり。「こハそら死するに  
こそ」とて。驅て引起してよく見れバ。法師にハあらずして。女児駒弔が。漬淖になりて死  
したれバ。「こハいかに」と驚きて。朝茅もろとも。さま／＼に勦るに。縊断たれバ救ふべ  
うもあらず。「彼とは似もつかぬものを。かくあかき夜に。見あやまちたること不審け  
れ。殊に法師ハ迹なく失て。目今捨たる傘もなし。彼ハ原来狐にてありけん。さて何とせ  
ん」とて。周章大かたならざるに。朝茅ハいたく鳴八をうらみ。且駒弔が横死を悲<sup>6</sup> しみ。  
「なほ救ふ事もや」とて。雄手にハわが子の亡骸をかき抱き。雌手を長やかにして。樋門の  
水を掬て。口にそゝぎ入れんとするに小草の上に物あり。「何ぞ」とて。とりてこれを見れ  
ば。疊帯に。「奸賊鴨八朝茅に賜ふ。枯樹春に回す大悲の靈薬」と写したれバ。且怪み且歎  
び。打開きて見るに。香氣馥郁たる丸薬十粒ばかりあり。こゝろみに三粒四粒囁碎きて飲す  
るに。駒弔立地に甦生て。氣力生平に異なる事なし。「さてハ彼法師ハ凡人にあらず。もし  
觀世音の現化して懲らし給ふにか」と思へバ。何となく毛骨いよだちて。惡勵刻剥の兎賊も。  
俄頃に物のおそろしく覚て。互に顔をうち見あはし。』<sup>7</sup> 〈挿絵第七図〉『 その夜ハ駒弔が恙が  
にはかるもの 俄頃に物のおそろしく覚て。互に顔をうち見あはし。』<sup>7</sup> その夜ハ駒弔が恙が



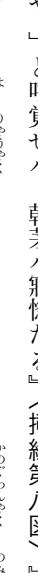
なきを幸にして帰りしが。この後夫婦ハ且く悪念をひるがへし。「去年より掠とりたる錢もあれば。それを奉錢として活業をせん」と議するに。このころハ鎌倉より陸奥へ赴くに。上下の渋谷より。國府方千駄谷を歷て。山中村に至り富塚村の津を渡りて。雑司谷より瀧野川村に出るに。一條の川あり。これをも打拂りて。西原。平塚。田畠。石濱。須田村。柳島へかゝり。又須田の邊なる一ツの小川と。大河を渡りしにや。又芝崎湯島を歷て。淺草へ出る捷徑もありしとぞ。古老の申傳たる。しかれども淺草ハ。卒街道ならざりしゆゑ。定れる旅店もなく』<sup>8</sup>旅人これを便なく思ふよしなれバ。こゝにて旅店を開さバ。よろしかりなん」とて。夫婦談合し。遂に背門のかたへ。はなれ坐敷を建そえ。もつはら木賃宿をして。旅人を援きぬ。元よりこゝへ一ツ家にて。外に宿かるかたもなけれど。奥へ下る人のみならず。諸國の道者。淺草の觀世音へ詣るに便よしとて。夜毎にこの家に歌るもの多し。しかるにそこのころ鴨八が家の北ハ。無戸分といふ里なりしが。其所へ亭坐敷を建たるに。大河を前にあてゝ。風景もつとも好し。今の戸五郎が亭といふところにて。人々な今戸の貸坐敷と呼びげけ

るになん。』

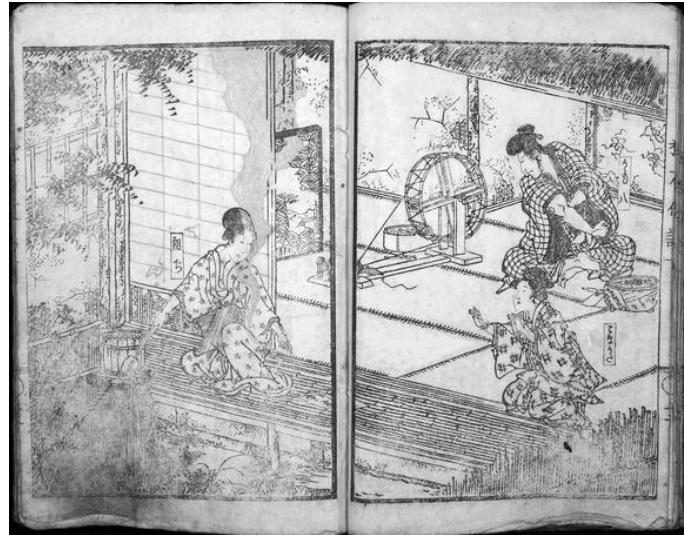
(四) 圓通菩薩ふたゝび朝茅を懲らす 附 駒欣の渡のはじまり

かくて又五七年の春秋を送るに。朝茅ハ舊病ふたゝび發りて。動すれバ定の外なる旅籠錢を貪り。剩物もてる旅客と見れバ。まだ夜ふかきに「曉方なり」と偽りて出立し。途に鴨八を待伏さして。その路銀を奪ひとらする事さへあれど。かけはなれたる一ツ家なれば。絶てこれをしるものなし。しかるに駒欣ハ。その心ざま親に似ず。稟性伶利て。ものゝ憐をもよく思ひわきまへ。年十ばかりのころより。布を織ることをよくして。年闌たる。かたにも劣らず。父母の非義非道を。かくまでとハしらざめれど。その行ひを見るに。傍痛き事のみなれば。をり／＼これを諫るに。父も母も更に用る氣色なけれバ。ふかく歎き。何にまれ善根を植て。父母の罪業を贖んと思ひしかば。母にもしらせずして。織たる布の價を。半ハ人にあづけて。二三年を経る程に。その錢やゝ五六十貫に及べり。さてこれをもて。潛に舡を造らし。わが住むほどよりよりハ。西なる汀に。施行の渡舟をとり立。龜高牛嶋などへゆくものゝ為に。便よくせしかば。里人等大に歎で。その功徳を稱讃し。駒欣の渡とぞ呼びにける。元より駒欣ハ。父母にこの事をしらせざれば。鴨八ハいふもさら也。朝茅は女兒が織る布にあはしてハ。錢を得る事のすけなきを不審み。問罵る事しばくなれど。駒欣ハ露ばかりも親を恨ず。只「そのあしき心を轉さし。信の道に導き給へ」とて。あさなゆふなに。淺草寺の觀世音を祈るの外。又他事なかりけり。

さる程に朝茅ハ。ある日「こゝちあし」とて打臥たれバ。駒欣ハ枕方を立も去らず。昼夜看病して。頻に藥を勧れども。朝茅ハこれを聴も入れず。「われ生れて卅餘年。一日も病たる事なし。たまゝ心持あしとて何程の事があらん。人ハ」<sup>10</sup>すべて。兩度の食の外に。物食でもあるべし。況て目にも見えぬ腹の中を。醫師が木の皮草の根の煮汁をもて洗ふとも。みな推量の沙汰にして。邂逅に病の愈るもあれど。それハ偶中なり。世に醫師の匙にすくひとらるゝ錢ほど。惜きものハなし。見よ翌ハ愈なん」といふに。駒欣は諫かねて黙止しつ。次の日に至りてハ。いよゝ起出る氣色なかりければ。駒欣又母にいふやう。「よしや醫師の藥を用ひ給

はずとも。貯給ふ薬あらば。進らすべう思ひ侍りて。彼此をかい探して侍るに。ふりたる骨柳の底に。この丸薬のはべりし。こハ何の症に用ひて功あるかハ』しらねど。灵薬と写しあれば。あしき事ハあらじ。用ひて見給へかし』といふに。朝茅聞て。頭を擡つゝ熟視て。『われその薬の事を忘れたり。これハ御身が稚きとき。鴨八どのが懊して。既に打殺し給ひたる折しも。この薬天よりや降けん。又地よりや涌けん。忽然としてわが手に入りしかばやがて囁碎きて御身が口に入れしが。俄頃に甦生て恙なき事を得たり。かゝるめでたき薬なれば。ふかく秘おきたるに。その後ハ病ものもなかりし程に。とりも出す事なかりき。こハ一トたび死したる御身が。立地に甦生たる灵薬なれば。尋』常醫師の薬とハおなじからず。さらバこれを用べし。とく湯をもて來給へ』といふに。駒欣ハふかく歎びて。やがて湯を汲て枕方におくに。朝茅ハ臥しつゝ彼丸薬を口の中につまみ入れ。一椀の湯を飲尽して。みづから胸を拊まはし。「この薬寔に功驗あり。心持すこし清々しくなりぬ。」一目睡せば平愈疑ひなし。その小屏風を引よせよ』といふに。駒欣ハこゝろ得果て立ぬ。さる間に朝茅ハ熟く睡りて。詰朝に至りても起ず。鴨八これを怪みて。枕に立たる屏風をうち敲き。「いかに朝茅。今朝ハいよ、快きか。起出て。早飯たうべずや。」と呼覚せバ。朝茅ハ寐惚たる』

『声して。「おい」と應つゝ屏風を搔遣り。「世に良薬もなきにあらず。きのふ彼丸薬を飲てより。一夜さこゝろよく睡りたるが。今朝ハ全く愈はてゝ。氣力生平にかはらず」とひとり言し、やをら起出るを見れば。怪き哉。只一夜の中に。白髪たる姥となりて。欣は松よりも瘦くろみ。腰にハ梓の弓を張り。九十九髪肩にふりかゝりて。雪の柳に異ならねバ。鴨八も駒欣も。「こハくいかに。」と呆果。顔うち膽りていふ所をしらず。朝茅ハいまだかくともしらで。漱がんとて盥に對へバ。わが影うつる水鏡に。且驚き且怪み。思はず盥をうちかへせば。<sup>13</sup>さつと流るゝ水よりも。物狂しく立つ居つ。「そもそもわが身ハ何ゆゑに。一夜の中に姥とハなりけん。こハ全く駒欣が。きのふ飲せたる薬にて。かく淺ましげに面影は変りけめ。薬にハ禁忌といふ事もあるものを。よくも思ひはからずして。親に毒を舐せたるよ原の姿にしてかへせ。わが夫も虚々と。見て居ましてハ事果ず。わがこの欣容がをかしきか。あら腹たゝし」と罵り狂ひ。善巧方便とハ。露ばかりも思ひかけず。桃源の人桃源を慕ひ。



八

「浦島が子の老を悲みしも。かくや」とおぼうばかりなり。駒舟ハ。勸解よしなき、きのふの  
薬を。わがこゝろから進らせたれば。母の『怒のふかき罪に』。「かはらるゝ事ならバ。命も何か  
惜まじ」と。思ひ迫りてよゝと泣バ。朝茅ハいよゝ焦燥て。彼を罵りこれを罵り。果ハ夫婦狂  
みあひて。障子を踏破り。鍋釜を打碎き。狂ひ疲れてさて已ぬ。

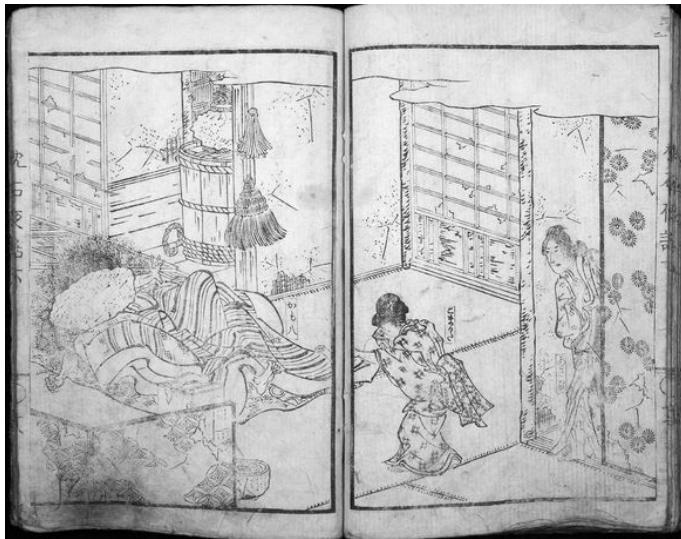
かゝりしかバ夫婦の間も。睦しからずなりて。鴨八は朝茅を婆々と呼ベバ。朝茅も又鴨八を  
乞児と罵り。動れバ物あらがひして。互ひに打うたるゝことしばゝなりしが。ある日又  
鴨八ハ。朝茅を打懲らすとて。爐縁に跪き倒れ。右の肩尖を打けるに。浪花にありて。水主  
の飛乗をせし時の打身。大に發りて。起居も自在ならねど。朝茅ハ薬を飲せんとも『<sup>14</sup>』せず。  
只駒舟のみ信やかに看病し。ある日母にいふやう。「わが爲にハ養父なり。母御の爲にハ夫に  
ておはする人を。なぞてかく鬼々しくハものし給ふ。こゝろある人ハ。友どちさへ病とき  
に。信を見するものぞかし。いかに心つよくとも。かくまでにハあるまじけれ」とて。理を  
尽してかき口説バ。朝茅冷咲て。「いやとよ。わが家の零落たるも。元彼愚物がなせしなり。

しかみならずかたゐ  
加之乞児とまでなり下りたるを。流石に従弟なれバと。憐み思ひて家に伴ひ。彼人が遣ひ  
捨てたる。金の半なりとも贖せん爲に。夫と齊眉。活業をうち任したるに。おのれあるじぶり  
て。却活業に疎く。酒を嗜み色を好むの外。しいだしたる事もあらず。しかるにわが身  
かく面影もかはりたれバ。彼かららず異妻を引入んかと。日來妬く思ひつるに。俄頃に起居  
も自在ならずなりぬれバこそ。わが心を安する日もあるなれ。只うち捨ておき給へ。御身が  
父と呼ぶ人は天地の間に絶てなきものを。」と回しかバ。駒弔ハますく呆れて。ふたゝびい  
ふことを得ず。

かくて朝茅ハ夜毎に出る旅客の料にて。水菜を大きやかなる桶に漬。いと重げなる石を壓  
として。庖桶の隅におきしが。鴨八が。夜も肩もうち臥てあるをいぶせく思ひ。「坐敷にあ  
りてハ。旅客を出すに」<sup>15</sup>妨也」とて。彼漬桶のほとりに臥さしたるが。鴨八ハ手足さへ動  
かしがたければ。氣を屈めて彼と争はず。日にく頭痛て堪がたかりしかバ。密に駒弔に  
いふやう。「われ久しくうち臥たるゆゑにや。頭熱りていと苦し。如此の箱に秘おきた  
る石枕あり。夏の日にこの枕をして睡れバ。涼風耳の根に起りて。竹奴にも勝り。冬ハ又  
暖にして。湯婆に勝るといふ。われかの枕をして。この苦痛を助らんと思ふに。もて来て  
さしてよ」といふに。駒弔やがて彼石の枕をとり出し。常の枕と引かへたるを。朝茅見てうち  
腹たて。「誰がゆるしてこの枕をさしたる。かゝる」ものを端ちかにおきて。人に見られなバ。  
よき事ハあらじ。全身自由ならざるに。なほ榮耀こゝろのうせずや。」といきまきつゝ。彼枕  
をとらんとて。足音たかく走り寄らんとするに。桶の上なる石。滾々と落かゝるを。「吐嗟」  
と臥む程もあらせず。臥たる鴨八が頭の上に轉落しかば。下にハ石の枕をせし程に。なじかハ  
たまるべき。鴨八は頭を微塵にうち碎れ。脳髄出て死でけり。駒弔ハこれを見て。母より先  
に走りよりて。教んとするに終に及ばず。上なる石をかき抱き。声を惜す泣叫べバ。朝茅も  
今さらに淺ましくて。やうやくに慚愧し。駒弔を賺しこしらへて。<sup>16</sup>その夜鴨八が亡骸を。  
がしの寺に葬りぬ。昔朝茅が枕橋のほとりにて。彼石の枕を見て。はじめてよからぬ心を發  
せしとき。鴨八に環會。終に夫婦となりて。互に暴惡を事とせしが。天罰やゝ報ひ来て。鴨  
八彼石枕をして石に打れたること不思議なれ。かゝりしかど朝茅ハ。面影のかはりてより。

いよゝ貪婪の心ふかく。夫が淺ましき死をなしたるを見ても。菩提の道にhanaほ疎く。鴨八  
が死たる時の歎勢をおもひよせて。ますゝ奸計をめぐらし。ひとり宿かる旅客の臥簾の上へ  
にハ。大なる石を釣おきて。石の枕を』  
『挿絵第九図』<sup>17</sup> さし。甲夜より燈火を置ず。その

〈挿絵第九図〉



熟睡するを張ひて。釣たる石の索を切落して打殺し。天の明ざる間に。屍を川へ流せし程に。  
これをしる人なしといへども。近郷の老弱ハ。朝茅が俄頃に姥となり。又夫鴨八死して後。  
その家却富饒に見ゆるを怪しみ。潛に目をつくるものもあれど。かけはなれたる一ツ家の事  
なれば。楚と認るよしもなかりけるとぞ。うべなるかな。朝茅ハそのはじめより。女児駒  
にもふかく匿して。絶てしらせす。その機密奸智。他の耳目を瞞すに足れるなるべし。<sup>18</sup>

⑤ 圓通菩薩二たび朝茅を懲らす 附 蛇塚姥が池の事の迹

光陰委なくて流水のごとく。朝茅が女児駒歟ハ既に十五才になりて。容色も人なみに勝れ。  
心ざま怜憐て。かゝる田舎にhaiと稀なるべき處女なれど。みづから恥て人にも見えず。母は

の隠匿をやゝ曉得りて。いくたびか諫れども。朝茅は露ばかりも聽人れず。「こハみな御身が久後の爲にてすなるに。かくいふハ。親のこゝろ子しらずにこそあるなれ。御身さおもひ給はゞ。母をバ疎しかるべし。わが子にさへ倦れてハ。生て樂しき』事もなし。自害せんにハ」とて。菜刀閃しなどするに。駒歎ハせんすべなく。その暴悪を諫かねし。身の憂事に思ひほそり。一年三百六十日。眉を開て笑ふ日ハなかりけり。

しかるにこのころ。夥の振子街に集合て。童謡をなんうたひける。その哥に。

日ハくれて壇にハ臥とも宿かるな。淺草寺の一つ家の石。

淺草の里のみならず。國々にこの哥聞えて。口順とせざるものなし。こゝをもて諸國の旅客ふかく怪み。彼一つ家に宿かるものなかりしかば。朝茅ふかく憤り思ひて。彼哥うたへる振子のわが門ちかく來るときハ。追ひ遣らひ。打ちらしなどするに。衆皆<sup>19</sup>はらゝと走退き。退バ又聚りて。うたふことはじめの「」とし。かゝりし程にある日の夕くれに。いと薦闌たる美少年。朝茅が門に立在て。腰なる笛を拔出し。音律妙に吹すさむを聞バ。「日ハくれて野のハ臥すとも」といふ童謡を。唄ふがごとく吹しかば。朝茅聞て大に怒り。筈かいとつて忙しく走り出。月光につらつら見れバ。このわたりにハ見も馴ぬ少年なれバ。ふたゝび怪み。理不盡にハ追ひもやられず。もてる筈を背にかくして。面を和げ。「こハ何地の人におはする。わが家にもの問んとて。立在給ふにや」といふに。美少年答て。「われハ淺草寺の行童なるか。けふ思はずも師の坊の氣色を蒙り。忽地寺を迫れてまどひ出たる也」といふ。朝茅聞て。「さらバ今宵ハ吾家に明し。翌ハつとめて師の坊に勸解給へ。かく御寺ちかく住侍れハ。殊さらには痛しく思ひ侍り」とて。信々しげに誘引バ。美少年ハなほ固辞ながら。さしてゆく方もなかりけん。終に裡に入りしかば。朝茅ハ竊に歎で。駒歎に給侍さして。夕餐をすゝめ。「とく睡り給へ」とて。用意の臥房へ伴ひつゝ。立出て思ふやう。「このころよからぬ哥を唄せて。わが活業の妨するハ。彼少年が所爲なるべし。しかるに彼師の坊の怒りに觸て。しりつゝわが家に宿りたるハ。さすがに淺き童ごゝろ<sup>20</sup>なり。今宵這奴をうち殺さバ。わが活業の路を開くのみならず。衣服なども價よろしくなりぬべきもの也。」とひとり点頭。夜の深をぞまちたりける。

この夜駒形ハ。はやく母の較計を猜して。又頻にうち歎き。日來しばく諫しかど。そのかひもなく。既にいくばくの人を殺し。今亦名たる靈場の行童をさへ。殺さんと圓[圖]り給ふ事。みなわが身によき衣を被せ。富人の妻ともして。老らくに世をすぐさんとて。惑ひ給ひし貪慾ハ。この身ゆゑなりと思ふほど。わが罪障こそいと深けれ。所詮彼少年にかはりて石に打れなバ。母も邪見の角折れて。』〈挿絵第十図〉<sup>21</sup> 積惡餘殃。因果観面のことわりを思

〈挿絵第十図〉



ひしり。菩提の道に入り給ふ。媒ともなりぬべし。『南無救世圓通觀世音大菩薩。親子が後の世救はせ給へ。』と念じをはり。潛に少年が閨の戸に立よりて。よく睡りたるを呼び覚せバ。一声應て起出たり。折しも窓よりさし入る、月影に。よくくその人を見るに。甲夜に臥たる少年にハあらずして。年紀升五六なる壯俊の。身にハ禪衣を被。順札棒とて。八角に削たる桑の杖をもてりけり。駒形ハこの形勢にふかく不審み。『甲夜に宿しまゐらせたるハ。二八ばかりなる美少年なりしが。御身ハその徒とも見えず。彼少年ハ。何所に』<sup>22</sup> 在

する。御身ハ又何國の人にて。何所よりこゝに入りて。睡り給ひたる」と間に。壯僕も又大に不審み。「われハ原常陸の人なるが。いとはやくより。身に大願ありて。西國。秩父。坂東。百箇所の靈場を順礼すること。すべて五周に及び。旅より旅に月日を送るもの也。しかしにこのころ。淺草寺の觀音堂に通夜すること。既に七日に及びしに。嚮に夢ともなく現ともなく。鬢つら結たる童子。忽然とあらはれて。説示し給へることあり。さて宣ふやう。『汝われに従ひて來れ。明朝夙願を果さすべし。汝が今ゆくところにて。更闌るころ。呼び覚すものあり。そのとき起出て。如此なる池の畔にありて。天の明るをまて。かならず宿願を果すことあらん。』と告給ふと見し夢ハ。はじめて覚たる心持ぞする。そもそもハ何所にて候ぞ」といふに。駒欣ますく怪みて。「さてハ彼少年ハ。觀世音の現化し給ふならん。この人の爲に。わが母の隱慝も。見あらはさるゝ前象にや。よしさもあらバあれ。終にハ脱れぬ罪科の。仏の導き給ふ人を。謀るとも謀られじ。外ながらに聞えて。はやくこゝを立去らせんにハ。」と深思しつ。声を低していふやう。「こゝは名たる一ツ家なり。御身この所に明し給ふときハ。身に禍あるべし。とくく出給へ」といふ。壯僕聞てうち点頭。「われハ身に深き」<sup>23</sup>願ひのあるものなるに。しばしも危き所に居るべきにあらず。誘しるべしてたべ」といへバ。駒欣答て。外面より出給はんハ便なかるべし。其所より潜り出給へ」と教るにぞ。壯僕ハ彼杖を衝立て足を踏かけ。遂に窓より脱れ出。北を望て走りけり。かくて駒欣ハ窓の戸を引よせて裡を闇くし。その臥簾に入かはりて。衣引被ぎ臥たりける。

さる程に野寺の鐘の音ちかく聞えて。丑三にもなりしかば。朝茅は「時刻になりぬ。」と起出。つゝ。裳を褰。足を翹。菜刀を引堤て。彼少年の枕方に潜びより。しばし寐息を窺ひて。切て放す釣索に。石ハどつさり地響し。忽地壓にうたかたの。あはれはかなき最期なり。朝茅ハ既に爲課せて。「わが物得つ」と笑を含み。遺戸一枚押開れば。月影隈なくさし入れて。昼よりもなほ明きに。と見れば只今打殺せしハ。彼少年にあらずして。思ひもかけぬ駒欣なり。「こゝそもいかに」と周章し。石を押除て抱き起すに。はや肉破れ骨碎。身も又ひらたうなりしかば。呼べどかへせどそのかひも。亡骸礎と搔遣て。「あら腹たゝしや朽

をしや。駒形彼少年に懸想して。わが機密を洩せしか。庶莫。者奴こそわが子の仇人なれ。縦隠狀の術をもて脱かくるゝとも。何地までか逃すべし。いで追畠んとゆふ』<sup>24</sup> つゝよりなほ凄じき瞳の光。白髮さつと逆だちて。簣子を高く踏ならし。外面へ走り出れバ。彼少年ハ。こゝより逃亡たりとおぼしくて。庭の千草に迹つけて。萩も薄も倒れたり<sup>〔〇〕</sup> 是をしほり葉にして追蒐つゝ。淺草寺の境内なる池の畔ちかく來て。向を佑と見わたせハ。汀なる松の根に件の順礼。尻をかけ。棍頭槍を突立て。普門品を誦し居たるが。朝茅が晴にハ。彼少年とや見えたりけん。高く嘆き。菜刀をうちふりて。切らんとするを。順礼の修行者ハ。はやく身を反りてこれを避け。棍頭槍を抜よりはやく。肩尖ふかく砍つくれハ。朝茅ハ忽地仰さまに『**挿絵第十一図**』<sup>25</sup> 倒れて。池にざんぶと沈みしが。見るゝ水中血に変じ、しばし

〈挿絵第十一図〉



宿かりて夜にハねずとも枕すな あさくさ野路のひとつ家の石 鳥岸信士

ハ浮もあがり得ず。時しもあれ。この日ハ七月十日にて。觀世音の懲參日なりしかば。卒堂に

ほんだう

通夜せし里人等。はやくもこの事をしつて。「すハ彼所の池に。人投ぬ」といふ程こそあれ。

喘々走り來つ、おのゝ池を圍繞せり。

浩所に。風楓とおろし來て。高浪逆波岸を洗ひ。朝茅ハ半身大蛇と變て。水中よりあらはれ出。紅なる舌を閃して。順礼の壯僕を。只一口に飲んとす。そのとき壯僕ハ。さわざたる氣色なく。懷より觀世音の御影一幅をとり出し。大蛇の頭にさし著れバ。毒蛇ハ身を縮めて<sup>26</sup>すゝみ得ず。これを見るもの戦慄。活たる心持ハせざりけり。時に壯僕。里の老弱をさし招き。「衆人わがいふ所を聞給へ。われ甲夜に觀音堂に參籠して。大悲の示現を蒙り。この一ツ家の姥が暴惡。從來の縁故をしれり。そもそも彼朝茅ハ。宿かる旅客に。石の枕をさせ。石を落して。是を殺すの兇賊也。原是その父戸五郎が。浪の山にありしどき。常州枕石寺の頭陀を殺して。その路銀を奪ひとり。これをもて生涯を。安くせんとはかりしより。彼頭陀が怨灵。ながく崇をなし。化して牛鬼となりて。戸五郎が妻綾瀬を突殺し。又女児朝茅が胎内にわけ入りて。五年が間これを苦しめ。出生したる駒秋ハ。孝順にして却て母に打殺され。今亦朝茅。かく淺ましき姿となりて。衆人に見らるゝ事。みなこれ因果の道理を示すものなり。且牛鬼を見て。命を隕せし法師。又鴨八朝茅に殺されたる旅客ハ。或ハ過去の惡報により。或ハ今生の罪業に因て。非命の死をなすものにして。すべて彼夫婦が手に死したるもの。一人として善人はなし。しかれども殺さるゝものに罪あれバ。これを殺すものいよ／＼罪あり。こゝをもて鴨八ハ石に打れ。駒秋ハ母に殺され。朝茅が最期こゝに至る。この因果のことわりを。衆人に告しらし。』<sup>27</sup>善を勧め惡を懲せよ。と大慈大悲の示現を蒙り。こゝに來つて彼毒婦を待こと久しき。いでその驗を見すべし」といひもあへず。大士の御影をさとひらきて。ふたゝび大蛇にさし著れバ。奇なるかな。觀世音の御影より。光明赫奕として。蛇身を射たりしかば。毒蛇ハ忽地水中に入ると見えし。元の朝茅が屍となつて。水面に浮むとひとしく。空中に光物あつて。その声牛の鳴が如く。その光り散乱して。白蓮花と化し。西を投て飛去るにぞ。壯僕ハしばしそなたを伏しおがみ。又觀世音を礼拝す。里人等これを見て。ます／＼奇異の思ひをなし。「さて戸五郎に殺』されたる頭陀ハさら也。野寺の長者。駒秋親子の亡冤に至る迄。みな觀世音の引接によつて。成仏し

たるにこそ」とて。不覺に感涙を流しけり。

かゝりける折しも。年紀五十あまりなる。回國の修業者。嚮より里人の背にありて。事の爲体を見聞せしが。終にもろ人を搔わきて。汀に立より。朝茅が屍に對て。頻に落涙す。里人等怪みてこれを見れば。是戸五郎なりしかば。「こへいかに」と驚くにぞ。戸五郎里人を見かへり。「われむかしこの里を逐電し。回國の行者となつて。諸國を徧歷するといへども。心より起れる出家ならねば。口に稱名ハしても。眞に<sup>28</sup>仏を念ずることなく。只錢を乞、口を糊ひ。旅に夥の年を経て。よる年なみに剛氣も撓み。一トたび女兒朝茅を見まほしさに。たまゝこゝに帰り来て。善惡につきてかなならず報ひある事を感悟し。なせし罪科を悔おもふに。大士の示現によつて。わが舊惡を。これなる壯佼にいはれ。毛骨もいよだちて覺しなり。今ハその事匿に及ばず。われ上總國浪の山の麓にありしとき。はからずも常州久慈郡。大門村枕石寺の度牒をもてる。要助道心といふ頭陀を射殺し。その路銀を奪ひとりしより。終に朝茅ハ。石の枕に。人を殺し。又女兒を殺し。わが身を<sup>29</sup>失ふ天罰を。見聞につけて慄に。とり残されし老が身の。うたてきかな」といひも果ぬに。順礼の壯佼つと立對ひ。「やをれ戸五郎。汝一人生残りしとて。いたくな恨そ。われハ汝に擊れたる。常州大門村。要助道心が一子要太郎なり。むかしわが父多病によつて剃髮し。回國に出しより。年を経れども帰り來まさず。母ハこのゆゑに思ひほそりて身まかりぬ。さるによつて。わが身あらふる靈場を順禮し。『父が生死をしらせ給へ。』と祈念すること。十年にあり。近曾この武藏に來つて。淺草寺の觀音堂に通夜する事七日に及び。今宵大士の示現によつて。父が寂期をしり。又讐家<sup>29</sup>從來の縁故をしり。又仇人の女兒なる。一ツ家の姥を殺して。衆人の冤を雪め。今亦汝に環會こと。みなこれ無量寿光阿弥陀佛。及觀音薩陀の冥助によれり。觀念せよ」と名告かけ。刃を閃して切て蒐れバ。「心得たり」と戸五郎ハ。杖もて丁と受ながし。二合三合打あひしが。要太郎が焦燥で打太刀に。杖の真中砍折られ。刀尖あまつて戸五郎が。乳の下ふかく砍裂れ。血に塗れて倒るゝを。乗かゝつて首かき落し。やがて父の靈鬼を祀りをはり。さて一五一十を寺僧に告。觀世音に酬願して。故郷へ立かへりしかば。あがたぬし縣主その純孝を賞美して。禄夥賜り。子孫ながく榮けるとぞ。』〈挿絵第十一図〉』<sup>30</sup>』



さる程に里人ハ。戸五郎朝茅駒欣が屍を。石の枕とゝもに。淺草寺の後面に埋て。これを蛇塚と呼びけり。蓋朝茅が蛇身となりしをもて。かく呼ぶにや。今も金龍山の背なる田の中に。一株の榎あり。この所蛇多し。是いにしへの蛇塚也といふ。そのころ里人ハ。なほ朝茅が怨灵の。崇をなす事もやと咲み。彼池の畔に宝倉を造りて。弁財天を勧請し。その靈を鎮まつりて。沙渴羅龍王とすといふ。又一説に彼弁財天ハ。駒欣を祭るともいへり。流行病あるとき竹の筒に醴を<sup>31</sup>入れて。社頭の木の枝に懸て祈るときハ。その病立地に愈るど。今に於て。淺草妙音院の池を。姥が池と稱て。僅に古蹟を遺せり。

夫惟れバ。念佛の功德無量不可思議なり。要太郎が父要助道心ハ。専念の行者として。戸五郎が矢先にかかり。非命の死をいたせし事。前世の惡業なりせば。是非を論ずるに及ばず。しかれども。父が念佛の功力によつて。要太郎ハ。たえてしらざる仇人に名告あひ。忽地に宿志を果して。孝道を全せり。又要介道心取期の冤苦によつて。生を牛鬼に懲といへども。その子の純孝を。仏陀の憐み給ふが故に。遂に得脱したるなるべし。おもふに昔要介が

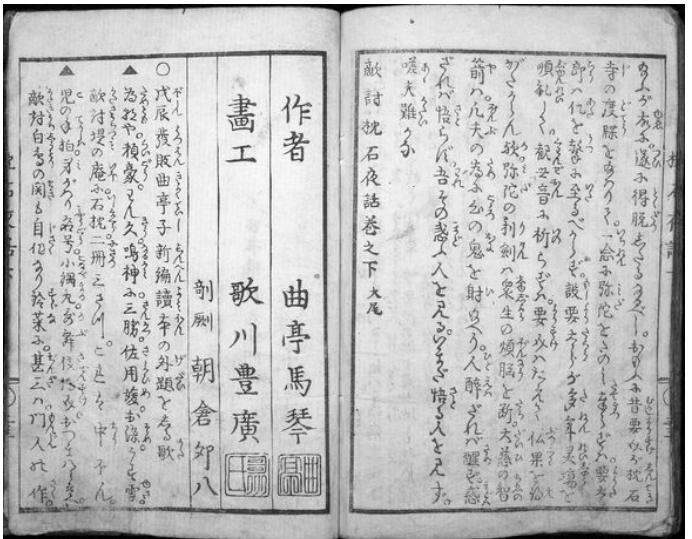
枕石寺の度牒を給はりて。一念に弥陀をたのみ奉らずハ。要太郎ハ仇を擊に至るべからず。設要太郎が多年靈場を順礼して。觀世音に祈らずハ。要介ハたえて仏果を得がたからん歟。

弥陀の利劍ハ衆生の煩腦を断。大慈の智箭ハ。凡夫の爲に心の鬼を射給へり。人醉ざれバ醒ず。惑ざれバ悟らず。吾その惑ふ人を見る。いまだ悟る人を見ず。嗟夫難かな。

### 敵討枕石夜話卷之下大尾』<sup>32</sup>

作者 曲亭馬琴  
歌川豊廣  
朝倉卯八  
括刷 晴  
氏  
亭曲

画工



○ 戊辰發販曲亭子新編讀卒の外題をしる歌

▲ 爲朝や。頬豪。わん久。

堤の庵に。石枕。一冊三さつ。これは中ほん。

▲ 爲朝や。頬豪。わん久。

鴨神に。三勝。佐用媛。お染。うす雪。

敵討

▲児の手柏。身がはり名号。小鍋丸。歌舞伎傳介。おつま八郎兵衛。  
敵討白鳥の関も自作なり鉢菜に。甚三ハ。門人の作。』

## 文化五年歳次戊辰

春王正月吉日發販

江戸通油町

日本橋新右衛門町

村田屋次郎兵衛

『33

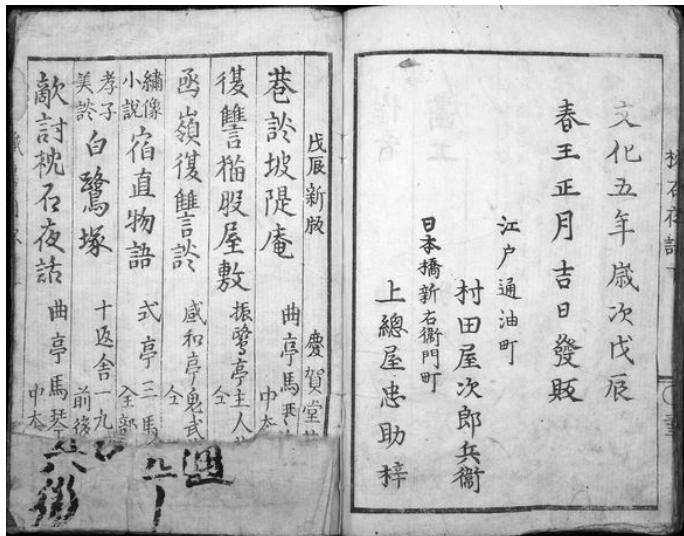
文化五年歳次戊辰

春王正月吉日發販

江戸通油町

村田屋次郎兵衛

上總屋忠助梓



戊辰新版 慶賀堂藏

巷談坡隄庵

曲亭馬琴著 中本三冊

復讐猫股屋敷

振鶯亭主人著 全一冊

凶嶺復讐談

小説 繪像 感和亭鬼武著 全二冊

宿直物語

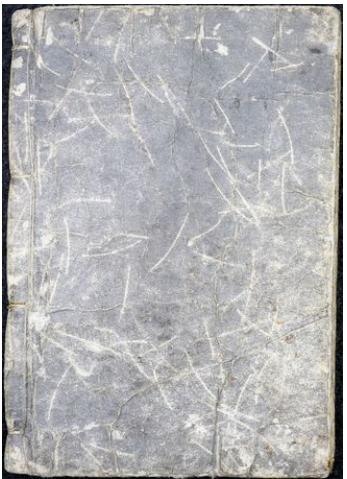
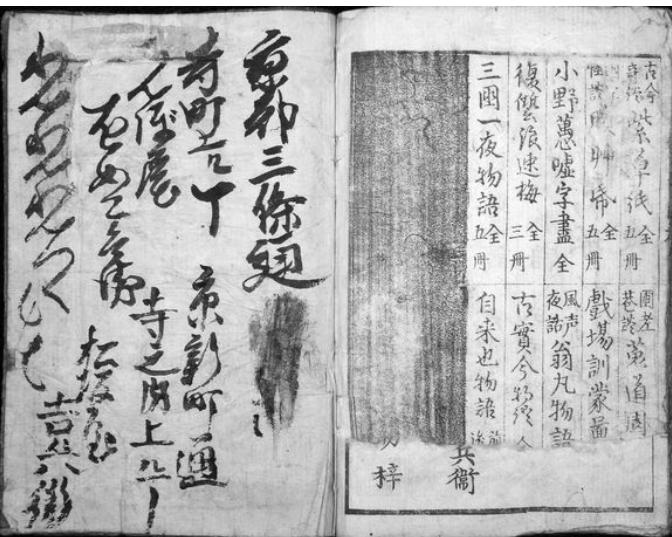
式亭三馬著 全六冊

孝子  
美談 白鷺物語 十返舎一九著 前後四冊

敵討枕石夜話

曲亭馬琴著

中本二冊



古今  
奇談 紫草紙

全五冊

芭談 菴道園

全五冊

國字  
怪談

頃艸

全五冊

芭談 菴道園

全五冊

小野豐噓字盡

全

芭談 菴道園

全五冊

復讐浪速梅

全三冊

芭談 菴道園

全五冊

三國一夜物語

全五冊

芭談 菴道園

前五冊

